文學博士前田慧雲師題字
安藝菅瀨徹照師著

佛身三十二相說教

京都 法文館藏版

264
240

015961-000-5

特18-917

仏身三十二相説教

菅瀨 徹照／著

M43. 8

ABC-1788

明治廿六年為
營瀬老人
山舟書題

三十二相八十隨形好要文

本行集經云時淨飯王卽召相師解占觀者呼使前來令看太子作如是言汝諸相師婆羅門等占是太子在我族中爲好爲惡汝等好看吉凶之相是時諸相師婆羅門等聞王勅已一心瞻仰太子形容各依先聖所有諸論共相量宜量宜訖已白於王言大王今者大得衆利何以故此太子者有大威德是大衆生今生王家大王當知此太子身有三十二大丈夫相凡有一人具三十二丈夫相者於世間中則有二種果報不差更無餘異何等爲二一者在家受世樂者則得作於轉輪聖王王四天下護持大地七寶具足乃至不用刀杖化人自然如法遍於海內若捨王位出家學道得成如來應正遍名稱遠聞充滿世界時淨梵王聞是記已復更重問婆羅門言太子何處是大丈夫

三十二相婆羅門言三十二種大人相者一者太子足下安立皆悉平滿二者太子雙足下有千輻輪相端正處中可喜清淨三者太子手指纖長四者太子足跟圓好五者太子足趺高隆六者太子手足柔輭七者太子手足指間具足羅網八者太子踹如鹿王九者太子正立下曲二手過膝十者太子陰馬藏相十一太子皮膚一孔一毛旋生十二太子身毛上靡十三太子皮膚細輭如兜羅綿十四太子身毛金色十五太子身體清淨十六太子口中深好可喜方正十七太子頰車方正如師子王十八太子兩脛廣闊十九太子身體上下縱橫正等如尼拘樹二十太子七處滿好二十一者具四十齒二十二者諸齒齊密二十三者齒不疎缺不鮎不齵二十四者四牙白淨二十五者身體清淨純黃金色二十六者聲如梵王二十七者舌廣長大

柔軟紅薄二十八者所食之物皆爲上味二十九者眼目紺青其三十者太子眉眼睫如牛王三十一者眉間白毫右旋宛轉具足柔輭清淨光鮮三十二者頂上肉髻高廣平好大王此是太子三十二種大丈夫相如是具足

大般若波羅蜜多經云善現云何如來應正等覺三十二大士相善現世尊足下有平滿相妙善安住猶如奄底地雖高下隨足所蹈皆悉坦然無不等觸是爲第一世尊足下千輻輪文輞轂衆相無不圓滿是爲第二世尊手足皆悉柔輭如覩羅綿勝過一切是爲第三世尊手足一々指間猶如雁王咸有鞔網金色交絡文同綺畫是爲第四世尊手足所有諸指圓滿纖長甚可愛樂是爲第五世尊足跟廣長圓滿與趺相稱勝餘有情是爲第六世尊足趺脩高充滿柔輭妙好與跟相稱是爲第七世

尊雙腨漸次纖圓如醫泥邪仙鹿王腨是爲第八世尊雙臂脩直厣圓如象王鼻平立摩膝是爲第九世尊陰相勢峰藏蜜其猶龍馬亦如象王是爲第十世尊毛孔各一毛生柔潤紺青右旋宛轉是第十一世尊髮毛端皆上靡右旋宛轉柔潤紺青嚴金色身甚可愛樂是第十二世尊身皮細薄潤滑塵垢水等皆所不住是第十三世尊身皮皆眞金色光潔晃曜如妙金臺衆寶莊嚴衆所樂見是第十四世尊兩足二手掌中頸及雙肩七處充滿是第十五世尊肩項圓滿殊妙是第十六世尊髆腋悉皆充實是第十七世尊容儀圓滿端直是第十八世尊身相脩廣端嚴是第十九世尊體相縱廣量等周帀圓滿如諸瞿陀是第二十世尊頷臆幷身上半威容廣大如師子王是二十一世尊常光面各一尋是二十二世尊齒相四十齊平淨蜜根深白

逾珂雪是二十三世尊四牙鮮白鋒利是二十四世尊常得味中上味喉脉直故能引身中諸支節脉所有上味風熱疾病不能爲雜由彼不雜脉離沈浮延縮壞損癰曲等過能正吞咽津液通流故身心適悅常得上味是二十五世尊舌相薄淨廣長能覆面輪至耳髮際是二十六世尊梵音詞韻和雅隨衆多少無不等聞其聲洪震猶如天鼓發言婉約如頻迦音是二十七世尊眼睫猶若中王紺青齊整不相雜亂是二十八世尊眼睛紺青鮮白紅環間飾皎潔分明是二十九世尊面輪其猶滿月眉相皎淨如天帝方是第三十世尊眉間有白毫相右旋毛輭如覩羅綿鮮白光淨逾珂雪等是三十一世尊頂上烏瑟膩沙高鎮周圓猶如天蓋是三十二善現是名三十二大士相佛說寶女經云於是寶女問世尊曰如來有三十二大人之相前世

宿命行何功德而致是相遍布于體佛告寶女吾往古世行無量德合集衆行由得是相遍于身體今粗舉要如來之相足安平立大人相者乃往古世堅固勤助而不退轉未曾覆蔽他人功德故如來手足而有法輪大人相者乃往古世興設若于種種施故如來至眞指纖長好大人相者乃往古世別說經義救護衆生令無患故如來手足生網鞔理大人相者乃往古世未曾破壞他人眷屬故如來手足柔軟微妙大人相者乃往古世而以惠施若于種衣細軟服故如來而有七合充滿大人相者乃往古世廣設衆施供諸乏故如來之膝至正無節蹲踞如鹿大人相者乃往古世奉受經典不違失故如來之身其陰馬藏滿猶如師子大人相者乃往古世廣修淨業修行備故如來至

眞常於胸前自然卍字大人相者乃往古世蠲除穢濁不善行故如來肢體具足成就大人相者乃往古世施以無畏安慰人故如來手臂長出於膝大人相者乃往古世人有作事佐助勸故如來身淨而無瑕疵大人相者乃往古世奉行十善無厭足故如來腦戸充滿弘備大人相者乃往古世其有病者施若于種藥瞻視療故如來師子出大人相者乃往古世殖衆德本具足備故如來具四十齒白大人相者乃往古世志性等仁於衆生故如來牙齒無有間疎大人相者乃往古施諫人諍鬪令和合故如來頰牙大人相者乃往古世則以微妙意可之物施與故如來清白美好髮眉大人相者乃往古世善自護已身口心故如來廣長舌大人相者乃往古世出言至誠護口之過故如來亹亹大人相者以無量福供養忝敬心行仁和與衆生願便

得覆蓋故如來梵聲哀懇之音大人相者乃往古世言語柔和
與衆人言護口節辭無央數人聞其所語無不悅故如來瞳子
如紺青色大人相者乃往古世常以慈因察衆人故如來之眼
如月初生大人相者乃往古世無麤暴悉心性和順故如來眉
間白毫大人相者乃往古世咨嗟歌誦閑居之德衆行故如來
肉髻自然大人相者乃往古世奉敬賢聖禮尊長故如來肌體
柔輭妙好大人相者乃往古世心念合集法品藏故如來身形
紫摩金色大人相者乃往古世多施衣服臥具牀故如來之體
一々毛生大人相者乃往古世離於集會衆鬧處故如來之毛
上向右旋大人相者乃往古世尊敬於師受善友教稽首從故
如來頭髮如紺青色大人相者乃往古世愍傷群黎不以刀杖
而加害故如來之身平正方圓無有阿曲大人相者乃往古世

已身衆生勸化安之令定意故如來立脊如大鉤鎖善有威曜
巍々之德大人相者乃往古世爲諸正覺興立形像繕修壞寺
其離散者勸便和合施無量懼其諍訟者化令和順故汝欲知
之吾往世時行於無量不可計會衆德之本故如來宿世奉行
如斯乃能致此三十二大人之相
勝天王經云八十種好者一無能見頂二頂骨堅實三額廣平
正四眉高而長形如初月紺瑠璃色五目廣長六鼻高圓直而
孔不現七耳厚廣長垂輪成就八身堅實如那羅延九身分不
可壞十身節堅密十一合身廻顧猶如象王十二身有光明十
三身調直十四常少不老十五身常潤澤十六身自將衛不待
他人十七身分滿足十八識滿足十九容儀具足二十威德遠
震二十一一切向不背他二十二住處安隱不老動二十三面

門如量不大不長二十四面廣而平二十五面圓淨如滿月二十六無顧頟容二十七進止如衆之二十八容儀如師子王二十九行步如鵝王三十頭如摩陀那菓三十一身色光悅三十二足趺厚三十三爪如赤銅葉三十四行時印文現地三十五指文莊嚴三十六指文明了不闇三十七手文明直三十八手文長三十九手文不斷四十手足如意四十一手足紅白色如蓮花十二孔門相具四十三行步不減四十四行步不過四十五行步安平四十六臍深厚狀如盤蛇圍圓右轉四十七手色青紅如孔雀項四十八毛色潤淨四十九身毛右靡五十口出無上香身毛皆然五十一唇色赤潤如頻婆果五十二唇潤相稱五十三舌形薄五十四一切樂觀五十五隨衆生意和悅與語五十六於一切處無非善言五十七若見人先與語五十八

音聲不高不下隨衆生樂五十九說法隨衆生語言六十說法不着六十一等觀衆生六十二先觀後作六十三發一音答衆聲六十四說法次第皆有因緣六十五無有衆生能見相盡六十六觀者無厭六十七具足一切音聲六十八顯現善色六十九剛强之人見則調伏恐怖者見即得安穩七十音聲明淨七十一身不傾動七十二身分大七十三身長七十四身不染七十五光偏身各一丈七十六光照身而行七十七身清淨七十八光色潤澤猶如青珠七十九手足滿八十手足德字佛阿毗曇經云以一千阿僧祇世界衆生所有功德成佛一毛孔如是成佛一毛孔功德偏如來身毛孔功德成佛一好如是成就八十種好功德增爲百倍乃成如來身上一相所成就三十二相功德增爲千倍乃成如來額上一白毫相以一千毫相功德增

爲百倍乃成如來一頂骨相一切飛天所不能見頂如是不思議清淨功德聚成就佛身是故如來於天人中最爲尊勝

優婆塞戒經云善男子一切世間所有福德不及如來一毛功德如來一切毛孔功德不如一好功德聚合八十種好功德不如一相功德一切相功德不如白毫相功德白毫相功德復不及無見頂相功德是故如來成就具足無量功德

大般若波羅蜜多經云善現云何如來應正等覺八十隨好善現世尊指爪狹長薄潤光潔鮮淨如花赤銅是爲第一世尊手足指圓纖長牖直柔輭節骨不現是爲第二世尊手足各等無差於諸指間悉皆充密是爲第三世尊手足圓滿如意輭淨光澤色如蓮花是爲第四世尊筋脉盤結堅固深隱不現是爲第五世尊兩踝俱隱不現是爲第六世尊行步直進庠審如龍象王是爲第七世尊行步威容齊肅如師子王是爲第八世尊行步安平庠序不變不減猶如牛王是爲第九世尊行步進止儀雅猶如鵝王是爲第十世尊廻顧必皆右旋如龍象王舉身隨轉是第十一世尊支節漸次牖圓妙善安布是第十二世尊骨節交結無隙猶若龍盤是第十三世尊膝輪妙善案布堅固圓滿是第十四世尊隱處其文妙好威勢具足圓滿清淨是第十五世尊身支潤滑柔輭光悅鮮妙塵垢不着是第十六世尊身容敦肅無畏常不怯弱是第十七世尊身支堅固稠密善相屬著是第十八世尊身支安定敦重曾不掉動圓滿無壞是第十九世尊身相猶如仙王周匝端嚴光淨離翳是第二十世尊身有周匝圓光於行等時恒自照曜是二十一世尊腹形方正無欠柔軟不現衆相莊嚴是二十二世尊齋深右旋圓妙清淨光

澤是二十三世尊齋厚不窊不凸周匝妙好是二十四世尊皮膚遠離疥癰亦無黶點疣贅等過足二十五世尊手掌充滿柔輭足下安平是二十六世尊手文深長明直潤澤不斷是二十七世尊唇色光潤丹暉如頻婆果上下相稱是二十八世尊面門不長不短不大不小如量端嚴是二十九世尊舌相輭薄廣長如赤銅色是第三十世尊發聲威震深遠如象王吼明朗清徹是三十一世尊音韻美妙具足如深谷響是三十二世尊鼻高脩而且直其孔不現是三十三世尊諸指方整鮮白三十四世尊諸牙圓白光潔漸次鋒利是三十五世尊眼淨青白分明是三十六世尊眼相脩廣譬如青蓮花葉甚可愛樂是三十七世尊眼睫上下齊整稠密不白是三十八世尊雙眉長而不白緻而細輭是三十九世尊雙眉綺靡順次紺瑠璃色是第四十

世尊雙眉高顯光潤形如初月是四十一世尊耳厚廣大脩長輪垂成就是四十二世尊兩耳綺麗齊平離衆過失是四十三世尊容儀能令見者無損無染皆生愛敬是四十四世尊額廣圓滿平正形相殊妙是四十五世尊身分上半圓滿如師子王威嚴無對是四十六世尊首髮脩長紺青稠密不白是四十七世尊首髮香潔細輭潤澤旋轉是四十八世尊首髮齊整無亂亦不交雜是四十九世尊首髮堅固不斷永無褫落是第五十逾那羅延是五十二世尊身體長大端直是五十三世尊諸竅清淨圓好是五十四世尊身支勢力殊勝無與等者是五十五世尊身相衆所樂觀嘗無厭足是五十六世尊面輪脩廣得所皎潔光淨如秋滿月是五十七世尊顏貌舒泰光顯含笑先言

唯向不背是五十八世尊面貌光澤淵怡遠離顰蹙青赤等過是五十九世尊身皮清淨無垢常無臭穢是第六十世尊所有諸毛孔中常出如意微妙之香是六十一世尊面門常出最上殊勝之音是六十二世尊首相周圓妙好如末達那亦猶天蓋是六十三世尊身毛紺青光淨如孔雀項紅暉綺飾色類赤銅是六十四世尊法音隨衆大小不增不現應理無差是六十五世尊頂相無能見者是六十六世尊手足指約分明莊嚴明好如赤銅色是六十七世尊行時其足去地如四指量而現印文是六十八世尊自持不待他衛身無傾動亦不逶迤是六十九世尊威德遠震一切惡心見喜恐怖是安是第七十世尊音聲不高不下隨衆生意和悅與言是七十一世尊能隨諸有情類言音意樂而爲說法是七十二世尊一音演說正法隨有情類

各令得解是七十三世尊說法咸依次第必有因緣言無不善是七十四世尊觀諸有情類讚善毀惡而無愛憎是七十五世尊所以先觀後作軌範具足令識善淨是七十六世尊相好一切有情無能觀盡是七十七世尊頂骨堅實圓滿是七十八世尊顏容常少不老好巡舊處是七十九世尊手足及胸臆前俱有吉祥喜旋德相文同綺畫色類朱丹是第八十善現是名八十隨好善現如來應正等覺成就如是諸相好故身光任運能照三千大千世界無不遍滿

佛身三十二相說教

安藝　菅瀨徹照著述

第一に烏瑟膩沙無見相

○大般若經に云く、頂きの上に烏瑟膩沙あり、高く顯れて周圓なるこゝ、猶ほし天蓋の如し、○一切經音義に云く、肉髻は梵に嗢瑟尼沙といふ此に髻と云ふ、○無上依經に云く、頂きの骨涌起して、自然に髻を成す、○大論に云く、菩薩に骨髻あり、拳し等の頂だきの上にあるが如し、○觀佛經に云く、頂だきの骨團圓にして猶し合捲の如し、その色正白なり、もし薄皮を見るときは、卽ち紅色を作す、或は厚皮を見るときは、卽はち金剛色なり、○觀念法門に云く、頭皮金色を作し、髮紺青色を作す、一髩一螺卷て頭上にあ

り、頭骨雪色を作して、内外明徹せり、○往生要集に云く、かの頂だきの上に大光明あり、千色を具足せり、一々の色八萬四千の支を作す、一々の支中に八萬四千の化佛まします、佛々の頂だきの上にまたこの光を放てり、光々相次で乃ち、上方の無量世界に至る、上方世界より化菩薩雲の如くに下るありて、諸の佛を圍遶したまふ、○大論に云く、肉骨髻相青珠山の頂きの如し、青色の光明四邊より出づ、○觀佛經に云く、唯願はくは天尊少に、無見頂相を說て、佛の勝相を知しめたまへ、爾時世尊即はち頂三昧海に入り、佛の頂上肉髻の中をして、一々の毛孔より瑠璃の光りを涌出せしめたまふ、其光り水の如し、蠡文右に旋て十方世界に遍滿す、是の如く八萬四千の諸の毛髮の中に、皆是水相を出す、一々の水相また之に過るゝこと、百千萬倍數にして知べからす、是の諸の瑠璃の水上に衆多の

大寶蓮花を生ず、花に無數百千億の葉あり、葉に無數百千億の寶色を作て、三千大千世界に遍覆す、花の上に百千萬億恒沙の化佛ます一々の化佛頂肉髻の相より、諸の光を流し出ここ亦復是の如し、諸佛の身量虛空に同ず、佛々相次いで微塵界を盡す、復塵數の菩薩あり、身虛空に昇りて、大神通を現したまふ、○觀經觀音觀に云く、頂上に毗楞伽摩尼の寶あり、以て天冠と爲す、其の天冠の中に一の立化佛在ます、高さ二十五由旬なり、○文珠般泥洹經に云く文珠の冠り毗楞伽寶の嚴飾する所、五百種の色あり、一々の色の中に、日月星辰諸天龍宮、世間衆生の見んと希ふ所の事、皆中に於て現はる、○觀經勢至觀に云く、天冠に五百の寶花あり、一々の寶花に五百の寶臺あり、一々の臺の中に、十方諸佛の淨妙の國土、皆中に於て現ず、頂上の肉髻は盍頭摩花の如し、肉髻の上に一の寶瓶

あり、諸〻の光明を盛て、普く佛事を現ず、

この第一の相好、烏瑟膩沙無見相と云は、如來樣の御首りの頂きにある、肉髻と云莊嚴の事、肉髻とは二種に分る、一に佛の肉髻は螺髻と申して、髮がきり〳〵〳〵回ひ、其狀ち螺の如し、二に菩薩の肉髻は、束髮と申して髮を束ね結んで、玉の冠りを頂て在す、束髮は和訓に茂登度利と云、先づ佛の御首り頂上の相は高顯と高く顯れ、周圓と正圓にして、其狀ち花で作りし天蓋の如し、是を烏瑟の相と名け、又は肉髻と稱す、八萬四千條の髮毛は上に向つて靡き、小筋に生へ稠く並んで、塵垢の爲に汚されず、縺亂るなどの憂なし、油を付て櫛梳るに及ばす、至極柔かにして異香芬々の芳りあり、一髻一螺卷て頭上にありと、きり〳〵〳〵右に旋て、殊の外貴ふに拜したまふ、此を螺髻の相と名け、

又螺髻と稱す、無上依經に頂の骨涌起して、自然に髻を成ずること御說なされしは、御首の頂上正中に、拳の如き骨ヒヨイト凸に顯れ、其上に髮毛を生ぜしこと、其骨の色正白にして、春の雪日光に赫くが如し、亦た骨を包し皮の薄き所は紅色を作し、厚き所は金剛の色なり、內外明徹と內外貫徹して映ひ、骨の白きは白き光りを放ち、皮の金色は黃金の光を放つ、それに紅色を交て、よほど美く光り耀く、其凸の骨と皮との間に肉を盛り、其肉の上に髮毛を生じ、正圓に束ね結んで、高く骨肉を覆ふ、是を菩薩の肉髻と云ひ、又骨髻と云、大論には之を骨肉髻相と御說なされてあるこの骨肉の美き體は、佛も菩薩も同樣なれども、佛の肉髻は菩薩の如く、髮毛を束ね結たるに非ず、きり〳〵つと右に旋て螺の狀を作り、その髮筋の色艶は紺青にして、常に紺瑠璃の光明を放ち

たまふ、その光りは一つと空中に耀き散けると、一千種の色をなす、赤青黄白黒紫き、その他種々數多の色艶を放て虚空界を照すその一々の色糸筋の如くになりて八萬四千に分れ、その一筋〳〵の色の中より、八萬四千の化佛が續々現れて、輪然と寶蓮臺に坐したまふ、その衆多の化佛の御首りの頂きより、また光明が現れ漸々に光りが續き上りて、一天に鬚き渡り、うろ〳〵〳〵光り耀く分野は、百千萬億の日輪を並たる如く、いやはや明かなども美ひども、心も詞も斷果たこと、その虚空界の光りの中に、上方の無量世界を顯す、荘厳相の鮮かに拜るゝこと、鏡に向つてその面像を見が如し、その上方世界の諸の菩薩聖衆が、光明の雲に乗り、きり〳〵〳〵〳〵回下りて、香を焚き花を雨し音樂を奏して、本師の如來を御供養なさる、このとき佛の肉髻が、乍ち青き玉を並

べし山轉ド、青々とその色鮮かに赫き、肉髻の四面より、再び紺瑠璃の光明を放ち、前の空中より天下りし、諸の菩薩聖衆の相好を照したまふ、觀佛三昧論經に、佛の相好功德のことを長々と御說なされ、終りに至て阿難尊者が、佛足を頂禮して如來様へ申上たまふやうは、佛の相好功德の廣大なること、審らかに聽聞仕り候ひ訖ぬ、次に佛の無見頂相の功德利益を、示したまへと御願ひなされた、無見頂相とは、聲聞緣覺菩薩の眼では、決して拜むこと能はざる所の、至極廣大なる頂きの荘厳である、その時釋迦如來、無見頂相の功德の廣大なること斯の如しと、直ちに頂三昧海に入らせられた、所が不思議なる哉、頂上肉髻の毛孔の一々より紺瑠璃の光明が續々溢れ出て、ひか〳〵〳〵〳〵耀き昇る、その體あだかも山谷の雲霧、空中に昇が如く、その光明に隨て、肉髻

の髪毛もまた、きり〳〵〳〵右に旋て空中に昇り、肉髻の髪毛こ、紺瑠璃の光明こ、上方の無量世界に充々渡りた、序でまた御首りの總體に生し、八萬四千の髪毛も、殘らずきり〳〵〳〵右に旋て空中に昇る、その昇る勢ひの旺なること、前に勝て百千萬倍、ついに虛空界はさらーつと、平ら一面紺瑠璃の、光明色となりて仕まうた、その手廣の青々と、光り耀く分野は、蒼海の水面を、一目に眺るが如く、さてその光明紺瑠璃の水面に、衆多の大きな蓮花が生出る、その花の一々に、無量百千の葉を具へ、葉の一々にまた、無量百千の寶の色を現す、その寶の色の光り遍く三千大千世界に充々て、諸の有緣の衆生を濟度したまふ、この大寶蓮花の上に、百千萬億恒沙の化佛ます、一々の化佛の肉髻より、光明の溢れ出ることまた前の如し、その化佛の身の丈虛空

と齊し、紫摩金色の佛體にして、漸々に現れ增す、增て空中を悉くこと、滿潮に濱邊を埋るが如くである、終に十方微塵世界に、金色の佛體充々たまふ、その佛體に傍て、無量塵數の菩薩が現れ身を空中に上して、種々の神通を現ずたまふ、又た極樂の觀世音菩薩は、御首りに毘楞伽摩尼といへる、寶を頂て在す、この毘楞伽摩尼と云こ、帝釋天の首りに、頂て在す貴ひ寶ら、この寶の光りを以て、三十三天の天人の城を照したまふと、城内の金銀七寶の莊嚴があり〳〵と見ゆる、それほこ貴ひ毘楞伽摩尼を以て、作り立たが觀音の寶冠である、その寶冠に、本師彌陀の分身化佛を乘て、本師の德を尊敬したまう、その化佛の身の長け二十五由旬立乍ら百福莊嚴の手を伸て、有緣の衆生を招き寄せ、四辨八音の聲を發して、甚深微妙の大法を說演たまふ、文殊菩薩の寶冠も、

この毘楞伽摩尼の寶ら、五百種の色を具へ、その色の中に月も星も日輪も、欲界の六天、龍宮世界など、審さに乘せ現して、之を諸の衆生に見せたまふ、次に勢至菩薩の御首りの寶冠には、寶の花鮮かに開き、その數五百、花の一々に寶の臺を顯す、その數五百、その臺の上に十方淨土の莊嚴相を現して、諸の衆生に拜せたまふ、頂上の肉髻は、鉢頭摩花の如し、鉢頭摩花は赤ひ蓮すの花肉髻の髮の色は紺青、骨は正白、肉を包みし皮の薄き所は紅色、厚き所は金色、今鉢頭摩花の如しと御說なされたと、皮の薄き所の紅色を、赤ひ蓮花に比例したまふ、肉髻の上に一の寶瓶がある寶瓶とは寶の器、その器の中に、智惠の光明を盛立て、種々の佛事を作て、諸の衆生を御濟度なされて在す、

第二に髮毛右轉紺青相

○往生要集に云く、頂の上に八萬四千の髮毛あり、皆上に向ひ靡き右に旋りて生たり、永く墮落なし、また雜へ亂れず、紺青稠密にして、香ひ潔よく細かに軟かなり、○又云く一々の毛孔より、五の光りを旋り生り、もし之を申るときは、脩長して量り難し、無量の光り普く照して、紺瑠璃の色を作す、色の中に化佛ます、稱て數ふべからず、此相を現し已りて、佛の頂さに還り住る、右に旋り宛轉して、即ち螽文を成ず、○觀佛經に云く、髮際赤眞珠の色の如し宛轉下り垂て五千の光りあり、間錯分明なり、皆上に向ひ靡き、諸の髮を圍ひ繞て、頂きの上より出づ、頂きを遶ること五匝して、天の畫師の如し、作す所の畫法、團圓正等なり、細きこと一絲の如しその絲の間だに諸の化佛を生ず、中略諸天八部一切の色象、また中に於て現ず、○又云く頭腦は頗梨の色、十四の脉あり象の畫具足せり

又十四の光あり圍ひ遶る、○大論に云く、毛孔より光明を出して、徧く十方世界を照す、一々の光の中より、七寶千葉の蓮花を出す、一々の花の上に皆坐佛在ます、一々の諸佛無量の光明を放ち給ふ、一々の光の中より、七寶千葉の蓮花を生ず、一々の花の上に皆坐佛在ます○往生要集に云く、耳厚して廣く長く、輪垂成就せり、旋り生し七毛より、五の光を流し出す、其光に千の色あり、色ごとに千の化佛在ます佛ごとに千の光明を放ち、遍く十方無量の世界を照したまふ、

この第二の相好、髮毛右轉紺青相と云は、如來樣の御首りの髮毛の莊嚴のこと、髮毛の數八萬四千、一々みな上に向つて靡き、毛孔より五の光りを放つ、光りと髮筋と兩つ乍ら生揃ひ、栴檀沈水など云は、結搏な芳りを備へ、異香紛々と薫ず渡る、その色紺青八萬四千の一々の髮毛より、常に紺瑠璃の光明を放て、空中の雲

にかゝやく、その色艶の美しさは、四方上下に研立た瑠璃の鏡を懸たるが如く、その光り諸〳〵の化佛を乘て、本佛の頂きに還り住り右に旋て螺文をなす、佛の髮毛は右卷にきり〳〵つと回て、その狀ち螺の如し、その髮毛より放つ所の光明も、またきりきりつと回て空中を照す、之を螺文の相と名く、髮の生際の一々に赤眞珠の色を備へ、五千の光明耀き現れて、頭部一切の髮をくる〳〵〳〵遶る、その遶る形ちは旋火輪の如し、旋火輪は線香に火を付て、手早く回すと火が輪になりて見ゆる、髮毛を遶る五千光明一々輪に見る、その美さは天の畫の如し、畫ける光りの筋は、細くして糸の如し、その糸筋の間だ〳〵に、諸の化佛及び諸天善神が續々現れて、種々の神通を現ずたまふ、又た頭腦一切頗梨の色を備ふ、色に十四の脉あり、その脉美くしてこれまた畫るが如

し、畫の一々に十四の光りあり、頭腦の脉と齊し、十四の光りの一々に、十四の色を備ふ、光りと色と相交りて、一切の髪を遶り照す、或は毛孔の一々より、大光明が赫き現れて、十方世界に充滿る、光りの中に七寶千葉の蓮花を生ずる、七寶とは金と銀と瑠璃頗梨、硨磲赤珠碼碯の七つ、千葉とは一莖の蓮花に、一千枚の葉を備ておること、一々の葉悉く七寶の染分け、金の光りは銀に映ひ、瑠璃の光りは頗梨にかゝやき、硨磲の光りは碼碯を照す、一々の花の上に諸の化佛在して、右坐禪の膝を組み、小首傾げて衆生濟度の事を、御思案なさりて在す、又た耳の葉厚くして長くたれ、ぐるりに七つの毛を生ず、其色紺瑠璃、一々右に旋て毛先より、五種の光明を流す、其光り亂れて一千種の色を分つ、色の一々に同色の化佛在す、その數一千體、一々の化佛また一千の光

明を放て、身を空中に上し、自在に遊行したまふ、放つ所の光明十方世界に充滿渡り、種々の佛事をなす、もし衆生ありてこの光りにまうあうては未來世に於て必ず、佛の妙法をきゝ、終に成佛の道に入る、

第三に面輪端正滿月相

○往生要集に云く、面輪圓滿にして、光澤𤍠怡なり、端正皎潔にして、猶し秋の月の如し、○觀佛經に云く、面門の光明白色なり、猶し寶山の如し、內外俱に淨し、無量の化佛にまします、眞金の精色なり、時に諸の化佛の面門より光りを出す、その光り五色遍く十方を照して、諸佛の面門に入る、○往生要集に云く、額ひ廣く平正にして、形相殊に妙なり、○觀佛經に云く、面上に三輪の相あり、髮際の相あり、皆金色の光を出す、その金色の光り化して金牀となる、

金牀の上に千の寶幢あり、寶幢の上に千の寶蓋あり、この寶蓋の下に諸の寶幡あり、この諸の寶幡の中に、無量の化佛ましまして、苦空無常無我の法を說たまふ、○又云く左右の二眉、形ち月の初めの如し、卷て諸の毛を生ず、その色艶紫きなり、毛端紺青瑠璃の妙光色ありて比とするなし、眉の光り兩ながら、辟き散けて諸髮に入る○往生要集に云く、鼻脩高直くして、鸚鵡の觜の如し、表裡清淨にして、諸の塵翳なし、○觀佛經に云く、鼻より二光を出す、その光り遍く十方世界を照す、化して大水となる、その水空に住りて諸光に流れ入る、その光りの間だに頗梨の山を出す、その山の間だに七寶の花を生ず、その花臺となる、上に衆の水を湧出す、その水金色にして、猶し金幢の如し、その金幢の內に、百千の化佛まします、一々の化佛身の毛孔の中に、八萬四千の上妙の寶色あり、その寶色

の中より、また光明を放つ、その光り微妙にして恒沙の色あり、○又云く頰上六畫の中、左右正に等し、妙光の色の耀艶、常に閻浮檀金に倍す、光色遍く佛の面相を照して、淨金色の如くならしむ、譬ば百千の日月を和合せるが如し、○大經に云く、時に應ぶて無量尊容を動して、欣笑を發したまふ、口より無數の光りを出して、徧く十方の國を照す、回光身を圍遶し、三帀して頂より入る、○心明經に云く、佛衆生を愍傷して、大慈の笑ひを行ぶたまふ、○觀佛經に云く、佛微笑したまふ時、口中に大蓮華を生ず、その花に光りあり百億の日月星宿を合するが如し、その宿月の間だに、百億の化佛まします、

この第三の相、面輪端正滿月相と云は、如來樣の御面像の莊嚴のこと、佛の御顏は顏貌端正超世希有ご御說なさりて、人天菩薩

の顔貌に勝れ、殊の外貴ふに拜れたまふ、惡人可愛女人不便の、慈悲柔軟の花の顔せ、威光尤も堆く、色艶の嬉しきは、閻浮檀金に超へ、實にうろ〳〵〳〵光り耀きたまふ分野は、滿月東の山端に懸るが如く、極樂の蓮華の御坐へ、無量の衆生が參て來るその度々に妙なる御聲を擧させられ、善哉〳〵能ふ參たこ、丹花の唇るを開きたまふこき、ぱーつと五色の光明が赫ぐ、その光明奇麗微妙の花こ化して、ばら〳〵〳〵行者の前に降り下る、行者合掌悲咽不能言、身心快樂如入禪定、參た衆生はその有難さ貴さが、身節に徹へ、兩手合せて俯首て、嬉し涙に咽の外はなひ、その時本師の如來も、完爾と微笑を含せられ、青蓮の御眸りに、觀喜の涙だを御溢しなさる、時々御面像より、正白の光明を放ちたまふ、其相白銀の山を揑た如くに拜るゝ、內外貫徹てかゝ

やゞ分野は、ギヤマの器を見る如く、金色の化佛光りの中に出現して、五色の光明を放ち、普く十方世界を照しつゝ、ついに法界諸佛の御面像の中に入りたまふ、面上に三輪の相あり、髮際の相あり、三輪の相とは、佛の額ひは廣く平かに正し、髮際の相とは髮の生際の殊勝なこと、この二相より金色の光明を放ちたまふ、その光り化して黃金の床となる、床の上に寶の幢を立並ぶ、その數一千、幢の正上に寶の天蓋が懸る、その數一千、天蓋の下に寶の幡を並ぶ、その數衆多、その中に無量の化佛在して、甚深微妙の大法を說たまふ、二つの眉ひはりて帝釋天の弓の形ちをなす、或は月の初て出るが如く、三日月の相を作り、眉の毛は紫きの艶を備へ、毛端は紺青、常に紺瑠璃の光明がかゞやき、面前に靡き散けて、終に頂きの髮毛の中に隱れ入る、又た佛の鼻筋は、高く

脩く正直にして、鸚鵡の觜しに似たり、裏表倶に清く鮮かにして一點の塵なし、鼻の孔より二種の光明が顯はる、乍ち化して水となる、その水靜かに光明の空中に流る、水と光りとの間だに頗梨の山を現す、その山の間だに美しき蓮花が生出る、その花片一々皆、金銀七寶の染分け、その臺の上に清淨潔白の水、自然に湧出る、水の色は紫摩黃金にして、水の狀ち黃金の幢を見が如く、その幢の中に百千の化佛まします、各皆御身の毛孔より、八萬四千の光明を放ちたまふ、その光りの色百千萬億、無量無邊に變て、佛の面前に充滿る、また佛の頰の表てに六の畫がある、その色の妍しきは閻浮檀金に勝る、その艶の光り御面像に映ひ耀ひて、百千の日月を揑し如く、國中の人天十方來生の菩薩、聲聞大比丘衆各皆閻浮檀金色の、御面像を拜み奉て、歡喜胸に溢れ、渴仰肝に銘ずる計りなり、或は莞爾と微笑を含みたまふとき、口より無數の光りがばら〳〵〳〵〳〵現れ出る、その光り佛の御身を、くる〳〵〳〵三返遶りて、頂きの中に隱れ入る、又た口より大蓮花を吐現したまう、その花に無量の光りあり、ぱーつと空中に散けて、百千萬億の月や星を、千萬里の大虛空に、懸幷べたる如く中に百億の化佛在して、種々の神通を現ドたまう、此等の所作を皆、佛の面輪端正の相と云、面輪は顏のこと之を面と云、卽ち心の看板、人の名譽を顏で示す、顏役とか顏が好とか、能く顏を賣て居とか、あの人の顏を立るとか、これその人の名譽なり、何とか身に落度があると、耻布て顏出が成ぬとか、親の顏をよごしたとか、親の顏を汚したとか、世間へ對して合す顏がなひとか、此が卽ち名譽を失ふた詞、十一面觀音には、御顏の數が十一ある

本面は本師彌陀の御顏貌、餘の十面は菩薩の御顏貌、前の三面は慈悲柔軟の相、此は無量の衆生を殘さず餘さず、皆助けるの大悲を示したまふ、左りの三面は怒りの體を現して在す、此は惡魔外道を降伏なさるゝ勇氣を示したまふ、右の三面は牙を上に向て在す、佛の口中に四の牙がある、下二本の牙より現るゝ光明は、人天菩薩を御照しなさる、上二本の牙より現はるゝ光明は、三惡の罪人を御照しなさる、今右の三面に牙を上に現したまひたは、即ち三惡の罪人を、濟度するの義を示したまふ、後の一面は完爾と微笑を含で在す、此は本師彌陀の慈悲心を以て、衆生濟度なさるゝを御滿足に思召す、歡喜の相を示したまふ、觀音は名譽あまた在すゆへ、御顏を十一現して、之を衆生に拜せたまふ、また顏は心の看版、釋迦佛の兩脇に、文殊普賢の二菩薩が在す、文殊は釋迦

の智惠を主りたまふ故、御顏に勇氣の相を顯して、普賢は釋迦の慈悲を主りたまふ故、御顏に柔軟の相を顯して在す、胸に充る悲智の二門、おのづと面てに溢れ現はる、御顏の勇氣に應ずて、勢ひ猛き獅子に乘り、氷りの劒ぎを手に提け、鬼神外道も來ば來ひ一時に降伏して見せると云、智惠の鋭ひことを、御知せ下さるゝが文殊菩薩、佛けにこの勇氣の相がなくてはならぬ、何となれば佛法には、生物を殺なとか人を痛めなとか云、慈悲柔軟の敎を作す、斯る柔かな慈悲心ばかりにては軍はできぬ、日本人民が殘らず、釋迦の敎を信ずたら、外國より軍兵を差向て責込だ時、負て逃るの外はなひと、かう思ふ人があろふも知れぬ、其で佛法は中々そんな弱ひ者ではなひぞ、猛きこと獅子王の如し鋭きこと劒ぎの如しと、文殊菩薩は持物が劒ぎ乘物が獅子、併しかやうに勢ひ

が強ひ計りでは、海陸二軍の奥の院のやうに見へ、人を殺すが佛法か、腕力主義か佛教かと、かうまた心得成て遠慮も用捨もなく勝手次第に人を、打たり叩ひたりすることになりても困る、其で強ひ計りが佛法ではないぞよと、普賢菩薩は非男非女と云、愛らしき姿たを現して、柔軟の御顔に、莞爾と微笑を含せられ、獣の中で殊に柔かな、性を備へし象に乗て、手に蓮花を御持なさりて在す、我が佛法の慈悲道徳の相と云もの、勇氣を以て衆生を御濟度の時は、文珠菩薩が劍ぎを提げ、獅子に乗て現れさせられ、仁愛を以て衆生御濟度の時は、普賢菩薩が蓮花を持ち、白象に乗りて現れたまふ、同ど八地の菩薩でも、不動の明王は聲顔して、兩つの牙と兩つの眸りを上下に恕らし、兩手に金索と劍ごを提て、ぼろ〳〵〳〵燃る火の中に立てござる、此は三界の火宅に在て天上天下を睨み付け、鬼神外道も、鐵粉微塵に打碎くこと、佛智の勢を表したまひた御姿た、又た地藏菩薩は、至極柔和な御顔付右の御手に柔軟の杖、左の御手に如意寶珠、吾は無量永劫成佛はせぬ、何々迄も六道の辻を駈回り、一切衆生に佛縁結で、迷の苦患を遁れさせてやるぞよと云ふ、慈悲仁愛の相を現してござる、佛法は勢ひの強ひ斗りのものか、いや〳〵至極柔かなもの、爾れば柔和にして弱ひものか、いや〳〵中々以て劇ひものと、強弱その宜きを得て、中道を證りて在すが佛心の名譽、在間に於てもその進むを知て、その退くを知らざるは、之を名て猪武者と云、何も物に恐れて後すさり斗りするもの、之を名て臆病神と云、進むべき時はしつかり進み、退くべき時はしつかり退き、進退その宜きを考へて事を行ふを、君子と云ひ英雄と名く、佛は無量世界の

大君子、一切世間の大英雄にて在す故、勇氣と仁愛と、兩乍らその宜きを得てござる、今三十二相中の、面輪端正滿月相と云は、慈悲柔軟の御容貌を現し、種々の奇瑞を示して、之を衆生に觀念せしめ、ついに無上涅槃の佛果に、至らしめたまふ相好功德にて在す、

第四に眉間白毫右旋相

○大般若經に云く、眉間に白毫相あり、右に旋りて柔軟なること、都羅綿の如し、鮮かに白く光り淨くして、珂雪等に逾ゆ、○天台疏に云く、毫相は猶し珂雪の如し、毫には楞ありその毫中空らにして右に旋て宛轉し瑠璃の筒の如し、○往生要集に云く、これを舒るときは直くして長大、白瑠璃の筒の如し、放ち已らば右に旋て、頗梨珠の如し、十方面に於て無量の光りを現す、萬億の日の如し、光の

中に諸の蓮華を現して、上無量塵數の世界を過ぐ、花々相次で圓圓正等なり、一々の花の上に一の化佛坐したまふ、一々の化佛復た無量の光りを放てり、一々の光りの中に、亦た無量の化佛まします、是の諸〳〵の世尊行者無數、住者無數、坐者無數、臥者無數なり、或は大慈大悲を說き、或は六波羅蜜を說たまふ、○又云くかの佛の眉間に一の白毫あり、右に旋りて宛轉す、五須彌の如し、中に八萬四千の好あり、一々の好に八萬四千の光りあり、その光り微妙にして、衆寶の色を具ふ、十方面に赫奕として、億千の日月の如し、その光りの中に一切の佛身に現す、無數の菩薩ありて、集會圍遶せり、復た微妙の聲を出して、諸の法海を宣暢したまふ、又かの一々の光明遍く、十方世界念佛の衆生を照し、攝取して捨たまはす、我亦たかの攝取の中に在ども、煩惱に眼こを障られて、見こと能はずと雖ど

も、大悲倦ことなく常に我身を照したまふ、○又云く極樂國に生れて、尊顏を瞻仰し、白毫相を觀ざき、五百の色光ありて、我身を來り照す、即ち無量の化佛菩薩、虛空の中に滿たまふを見る、水鳥樹林及び諸佛所出の音聲は、皆妙法を演たまふ、○般舟讃に云く、眉間の毫相に七寶の色あり、色々に八萬四千の光りあり、光々に化佛菩薩衆ましまし、遍く神通を極樂界に滿じたまふ、○觀經に云く、無量壽佛を觀ずる者は、一の相好より入れ、但し眉間の白毫を觀するに、極めて明了ならしめて、眉間の白毫を見奉れば、八萬四千の相好自然に當に現る、○觀佛經に云く、如來に無量の相好あり、一々の相の中に八萬四千の諸の小相好あり、是の如きの相好は、白毫小分の功德にも及ばず、○論註に云く、佛法華經を說たまふごき、眉間より光りを放て、東方萬八千の土を照すに、皆金色の如くにし

て、阿鼻獄より上有頂に至るまで、諸の世界の中の六道の衆生、生死の所趣、善惡の業緣、受報の好醜、此に於て悉く見ゆ、○觀經に云く、爾時世尊眉間の光りを放ちたまふ、その光り金色にして徧く十方無量の世界を照す、佛の頂きに還り住り、化して金の臺となる須彌山の如し、十方の諸佛淨妙の國土、皆中に於て現る、或は國土あり七寶合成せり、復た國土あり純ら是れ蓮華なり、復た國土あり自在天宮の如し、また國土あり玻瓈鏡の如し、十方の國土みな中に於て現ず是如き等の、無量諸佛の國土、嚴顯にして觀つべきあり、韋提希をして見せしめ給ふ、○天台疏に云く、如來の眉間に白毫相あり、長さ壹丈五尺周圍五寸、光りを發して無量の國を照したまふ佛の頂きに還り住り、變して金の臺となる、廣く諸の國を現し、韋提希をして、安養界に生るゝことを樂は令む、

この第四の相好、眉間白毫右旋相と云は、如來樣の白毫と云莊嚴のこと、白毫とは眉の間だに、白ひ美ひ毛が生ておる、柔かなること柳綿の如く、或は蠶の繭の如し、その色正白にして、艷の妍しきは春の雪、日光に向つて耀ぐが如く、毫に八楞あり八楞は八つのかど、その狀ち八角にして中が空になりておる、之を掬んで引舒せば、ずーつと舒てその長さ身の丈と齊ひ、放ち已れば自然に縮んで、くる〳〵〳〵右卷に回込、その狀ち頗梨の珠を綴りし如く、この白毫よりばーつと大光明を放ちたまふと、その明かなること百千萬億の、日輪を並たるが如く、光りの中に五色八色、百寶色の蓮華を顯す、このもろ〳〵の蓮華、自然に空中に上りて、無數の光りを流す、その光り上無量塵數の世界を照して、花々相次ぐ、あまたの蓮花が續々現れ生じて、赤青白黃紫きの色を交へ、異香紛々と室に、結構な香ひを放つ、團圓正等と花の形ち正圓にして、大小の差別なし、一本の花の上に、一體の化佛が在す十本の花に十體の化佛、一千本に一千佛、一萬本に一萬佛、無量無邊の大蓮花が、光明の中に生並んで、その上に無量無邊の化佛か在す、一々の化佛また眉間の白毫より、大光明を放て前と同樣、光りの中へ無量の蓮花を並べて、無量の化佛を現す、この化佛立て虛空界を歩みたまふあり、足を止めて苦患の衆生を眺めたまふあり、或は坐禪の膝を組で、說法讀經したまふあり、又は差俯首て、方便攝化の思案に暮たまふあり、觀無量壽經には、この眉間の白毫は右に旋て、五須彌の如しと御說なさりてある、須彌は四方上下八萬由旬の山、それを五つ並べると、五八の四十萬由旬の數量となる、一由旬が四十里、四十万由旬は里數に直すと、一千六百萬里なり、釋迦

如來の御身の丈は一丈六尺、白毫を舒したまふと、一丈五尺の長さとなる、殆んど御身の丈と齊し、之を御縮めなさると僅か一寸、一丈五尺が一寸に縮ると、百五十分の一なり、この釋迦佛の白毫に准ずると、觀無量壽經の眞身觀に說てある、觀念の向へ御立遊す、阿彌陀如來の御身の丈は、六十萬億那由他恒河沙由旬ある故、この佛の白毫を舒したまふと、凡そまた六十萬億那由他恒河沙由旬の長さとなる、今五須彌と御說なされたは、白毫を縮め玉ひた時の數量、前に准ずるとまた百五十分の一位なことで有ふ、その百五十分の一に御縮めなされた白毫でさへ、須彌山を五つ並たほどの長さ、即ち一千六百萬里の數量となる、實に廣大究りて驚き入るの外なし、その一千六百萬里の、五須彌の白毫に、八萬四千の相好を具へ、一々の相好より八萬四千の光明を放たまふ、其光り金銀七寶、無量百千

種と、色を換へ艶を分て、十方世界に耀き渡る、宛も百千萬億の日輪月輪を、千萬里の空中に、懸並べたるが如く、その光りの中より恒河塵數の化佛菩薩が、續々並で浮び現れ、雲の如く霞の如く、極樂の空中に相集て、五色百寶の花を雨し、栴檀沈水の芳りを散し、音樂管絃の響きを奏して、稱讚功德の聲高々と、種々の妙法稱へつゝ、六十萬億那由他恒河沙由旬の、本師の如來を百重千重に取圍みくる〳〵〳〵〳〵繞り繞りて、恭敬尊重と御敬ひなさりて在す、又この化佛菩薩の充々た、八萬四千の光明が、十方世界に遍滿し、緣なき衆生に因緣結び、緣ある衆生に信を取せ、信心の行者に成ぬれば、攝取不捨と攝め取り、我能汝を守んと、夜晝常に護り續て、再び生死の大海へ捨給はず、永く三途の苦難に沈め給はず、依て吾等凡夫も此信得られたが、誠となら、立居起臥行戻、何に交る中から

も、攝取心光の懷ろ住居、朝な〳〵は報佛の功德と俱に起き、夕な〳〵と心光の佛智と俱に臥す、寢御坐の上の稱名も、獨り喜ぶとは思ふなよ、化佛菩薩の御守りの中、併し五年十年二十年一期の間だは、煩惱に眼こを障られて、不斷光明の吾身を、照し給ふをも知ず化佛菩薩の四方上下に、在すをも見奉らず、追付娑婆の緣盡て、息絶眼こ閉るとき、豫て証得しつる、往生のことはりこゝに顯れて、光明攝取の利益をさとり、化佛菩薩の相好をも拜み、安養無爲の極樂を、遙か向ふに打眺め、觀音勢至に誘れ、五々の菩薩に手を引れ無量の聖衆に守れて、賑々布く黃珠散蓮花の御坐へ忽然化生こ往生こげ、彌陀同體の御說りを開せて頂く、極樂に往生して仰で、大悲の尊顏を拜し奉れば、惡人可愛ひ女人不便の、慈悲柔軟の花の顏せ、莞爾と微笑を含せられ、青蓮の御眸りに歡喜の涙だ、丹花の唇

を開せられ、善哉〳〵の聲を相都に、眉間の白毫より、大光明を放て、參た衆生の頂さを照し給ふ、その光り四方に散けて、五百種の色をなす、一々の色の中に、無量の化佛在して、種々の妙法を演たまふ、行者之を見之を聞て、渴仰肝に銘ずるばかり、直ちに蓮臺を降りて、歡喜の涙だに咽ぶ時、寶林寶樹の大枝小枝に、白鵠孔雀の鳥が集り、七寶寶池の八種功德の水面に、鳧雁鴛鴦の水鳥が浮んで甚深微妙の法を囀る、又この白毫はその質、日光に耀く雪よりも白し、然るに時々金銀瑠璃頗梨、砗磲赤珠碼碯の、七種寶珠の色を放ちたまふ、色ごとに八萬四千の光明が耀く、光りの一々に化佛菩薩が相集り、身を空中に上り、種々の神通を現じて、參た衆生の眼こを慰め給ふ、經文に佛身の相好を、或は三十二相と御說なされ、或は八十隨形好、又は八萬四千相、種々御說なさりてはあれども、此

はみな略説と云て、その大畧を御示しなされたのであり、其實は無量無邊の相好功德にして、千とも萬とも億とも兆とも、世間の數法を以て説盡さるゝことてはない、斯る不可稱不可説不可思議の、相好功德を一所に集め纒めても、この白毫少分の功德にはとても及ばぬそよと、觀佛經の中に説てある、斯る廣大無邊な白毫故、御釋迦様か法花經を、御説なさる時分に、この眉間の白毫相より、金色の光明を放せられ、東方一萬八千の國土を照して、手廣ひ大地をづーつと、一面の黄金色に作たまひた、その黄金色の光りの中へ、下無間地獄の最底より、上天上界の頂上まで、殘さず餘さず皆現して、之を一層の大衆に御見せなさる、天上界なれど五衰退沒の相、人界なれば不淨の相に無常の相、或は四苦八苦の相、修羅道では鬪諍嫉妬の相、切つ切れつ倒つ顚つ、血身泥になりて戰ひ苦む分野、畜生

道では殘害殺戮の相、喰つ喰れつ呑つ呑れつ、血鹽を流して狂ひ死に、叫び死にする哀れな分野、餓鬼道では飢饉飢渴の相、喰ば火炎となり、飲ば湯玉となる、其が爲に喰はず飲ずの骨と皮、飢凍たる哀れな分野、地獄道では八寒の相に八熱の相、紅蓮の氷りに閉切られ、焦熱の火炎に燒焦され、無間の湯玉に煎じ煑られ、鐵丸咽喉を通され、天を仰ぎ地に臥して、七顚八倒の大苦患、かやうに六道衆生の苦患の相を、一々光明の中へ顯して、之を一會の大衆に御見せなされ、是見よ是此が六道輪回の分野ぞよ、斯る苦患が恐しけりや勇猛精進に修行して、佛果涅槃の証りを求めよと、御懇ろに轉迷開悟の大法を御説なされたが、法花八軸の御經である、又淨土の觀無量壽經の會座に於て、釋迦如來眉間の白毫より、金色の光明を放せられ、その光り十方無量の世界を照して、佛の頂さに回戻り、乍ち

化して金の臺となる、その狀ち須彌山の如し、その臺の上に十方の諸佛の淨土を現して、之を韋提希夫人に拜せ給ひた、一に七寶合成の國土、此は樹も林しも大地も池も、宮殿樓閣何も角も、皆悉く金銀七寶の所成にして、金の光りは銀に映ひ、瑠璃の光りは玻瓈を照し、硨磲の光りは碼碯に耀く、光りと光りが色を交へ、映ひ耀く分野は、心も詞も絶果たこと、二に純是蓮花の國土、此は百千萬色の蓮花を並べ、赤青白黄紫きなゝ、種々樣々色の異りし、花と花とが咲亂れ、赤ひ花には赤ひ光り、青ひ花には青ひ光り、黄なる花には黄なる光り、白ひ花には白ひ光り、花は頻りに光りを放ち、光りは鮮かに花を照す、花の色光りの艶、花と光りの色艶を以て、淨土の莊嚴相と成てある、三に自在天宮の國土、此は欲界第六他化自在天の、宮殿樓閣を以て、莊嚴の相を示したまふ、この第六の天は奪

他所作、究自娛樂故名他化と釋してある、此は第六天王の大神通力を以て、他の世界の樂みの具を、一々自分の天宮へ引寄て、樂み慰んで居が、他化自在天の樂相である、今現す所の諸佛の淨土にも是の如きの天宮ありと、假に比例して莊嚴相の、自在なることを御說なさりた、四に玻瓈鏡の國土、玻瓈鏡は玻瓈の鏡と書てある、七寶百寶寶は衆多あれども、光りの艶の鮮かなるは、玻瓈の寶を以て最第一とす、閻魔の御前に、八方八面の鏡を懸て、罪人の惡業を照し給ふ、之を淨玻瓈の鏡と云、淨は清淨の義、玻瓈の鏡は鮮かに淨く、細かに照し顯して、露聊かも罪や障りを、殘さぬと云意を表したものである、今玻瓈鏡の淨土は、純ら玻瓈の光りを以て莊嚴となす、地下も地上も空中も、うろ〳〵〳〵淨く鮮かに、耀くその分野は百千萬億無量無邊の、玻瓈の鏡を四面八方へ、懸並べたるが

如くであると知せたまふ、已上經文には四種の淨土を擧て餘を略すその他莊嚴相の美き、衆多の淨土を現して、韋提希夫人に拜せ玉ひた、時非レ無二佛語一と、釋迦如來一々、淨土の繪解をなさりた、是韋提希や、この淨土を某の淨土こ云、本師の佛けを、某の佛けと申し奉る、この御國を何々の御國こ云、教主の如來を、何々の如來と申し奉る、今汝ぢが拜む通り、莊嚴光明は結構なれども、この淨土へ參るには、かやう〳〵な勤めが入る、此淨土へもこれ〳〵の修行が無ては往生は叶はぬぞ、此御國へ、汝ぢがやうな、五障の女なは足踏はてきぬ、爰の御國へも心想羸劣の凡夫は、顔出は成ぬぞと、一々繪解をなされ、其見よ其五障の女人は佛法の非器、諸佛の淨土に忌嫌はれたる捨り者と、韋提希夫人の、邪見我慢の頭を叩付、そうして次に西方の、極樂を現し給ひ、是韋提希や、此が西方の極樂ぞよ、地下の莊嚴地上の莊嚴虛空の莊嚴、あの分野が拜れるか、本師の如來が、花の臺に端坐して、御說法なさりて在すが拜れるか、觀音勢至は左右に待べり、五々の菩薩は前後に在す、無量の聖衆が香を焚、花を雨して尊重したまふ、あの分野が拜れるか、韋提希夫人はあー勿體なひ〳〵こ、兩手合せて仰ぬいて呆て計りござる、是韋提希や、淨土は數々あれども、汝ぢかやうな五障の女が、參れる淨土は西方の、極樂より外にはなひぞよ、如來は抑山在しても、心想羸劣の、しみだれ女を助け給ふは、阿彌陀如來が御一佛ぞよこ、現に極樂を顯し、本師の如來を拜せて、親く御諭し遊したら、韋提希夫人は五體投地と、覺へず大地にひれ臥したまひ、自絶瓔珞と、頭の飾りを引千切、扨も嬉しや有難ひ、さすればどうぞ斯る淺間布、五障の女人が助る所の大法を、教へ給へや敎主世尊、西方彌陀の極

樂へ、往生するの近道を、授け給へや釋迦善逝と、謹で御願ひなされたら、釋迦如來善哉〳〵と御讃なされ、好こそ願ふた說て聞さうと、それから定善十三通りの觀法と、三福九品の善根と、自力修行を先に御說なされ、これ韋提希や、これが十九二十の自力の誓願、こんな自力は所詮汝ちが齒節には叶うまひと、速かに雜行自力の心を、捨離れさせ給ひ、終りに至て汝好持是語、持是語者卽是持無量壽佛名と、彌陀の本願南無阿彌陀佛を御苦ろに說て御聞せなさりたが、淨土の觀無量壽經である、かやうにそれ法花經の會坐では、光明の中へ六道生死の、苦患の相を現して、一會の大衆へ御見せなされ、これ見よこれ斯る苦患が恐しけりや、勇猛精進に修行して、速かに佛果涅槃の証りに至れと、目に物見せての御說法、觀經の會坐では、十方無量の諸佛の淨土や、西方の極樂世界を、光明の中へ

現して、韋提希夫人に拜せ給ひ、其見よそれ諸佛の淨土に忌嫌はれた、五障三從の徒ら者を、助け給ふが阿彌陀樣、迎へ取て下さるゝが、西方の極樂世界ぞよと、是亦目に物見せての御說法、斯る自在不思議の所作を現して、攝化の利益を施し給ふが、皆是釋迦如來の白毫相の功德力である、假に娑婆へ御出現なさりた、應身佛の白毫の功德でさへ、かゝる廣大な利益を施し給ふ、增て況んや本師の如來、阿彌陀樣の白毫相の功德利益は、貴ひとも廣大なとも、これは〳〵とばかり花の吉野山、心も詞も絕果てゝ、これは〳〵と唯呆をさますの外はなひ、

第五に眼睫紺色不亂相

○大般若經に云く、眼睫猶し牛王の如し、紺青齊く整ふて、相雜へ亂れず、○觀佛經に云く、眉の下に三の畫あり、眼眶の中に及ぶ、

旋て四光を生ず、青と黄と赤と白となり、上に向ひ豔しく出て眉骨の中に入る、眉毛の端に出ること復た前法の如し、枕骨より出て光を遶ること四匝して四色分明なり、黄色に化佛まします、身は黄金色なり、白色に化佛まします、身は白銀色なり、青色に化佛まします、身は金精色なり、赤色に化佛まします、身は硨磲色なり、是の如く右に旋て、益々更に明顯なり、○又云く如來の眼睫は、上下に各生ずて五百の毛あり、柔軟にして愛すべきは、優曇花の鬚の如しその毛端より一の光りを流し出す、頗梨色の如し前の衆相に入り、光明の色の中に頭を遶ること、一匝して枕骨より出て、前光を圍遶して、純ら微妙の諸の青蓮花を生ぜしむ、蓮花の臺の上に青色の蓋あり、梵天王ましまして、手に是の蓋を執たまふ、○又云く雙べる皆頭より、旋て二光を出す、青蓮花の如し、極めて微細を爲す、髮

を遶ること一匝して、枕骨より出て、諸の花に映飾す、花を開敷せ令めて、光明益く顯かなり、是の如き勝相に、無量の功德あり、

この第五の相好、眼睫紺色不亂相と云は、如來樣の睫の莊嚴のこと、佛の睫は牛王の如し、牛王は牛中の長たるもの、凡て諸の衆生に、各皆頭がある、之を主宰と云、主宰とはその宰を取て、萬事を支配するの主と云こと、梵天帝釋四天大王は、人天の主宰、人間天人の頭に立て、善惡邪正の支配をなさりて在す、人間刧初の主宰は轉輪聖王、修羅の主宰は阿修羅王、龍宮の主宰は大龍王、その他金翅鳥王とか、師子王とか象王牛王雁王などゝ、各皆主宰を置て、萬事を支配せしめたまへり、內證は佛や菩薩の變化にして、それ〳〵の形ちを顯してござる、大經には佛智の勢力の强きを比例して、猶し牛王の如し、能く勝ものなきが故にと御說なさりてある、今は牛

王の睫を喩として、佛の眼睫は猶し牛王の如しと御說なさりた、紺青齊く整ふとあり、紺青は瑠璃の玉の色、睫の艶よほど妍しくして紺瑠璃の玉を磨き立たる如く、赫々と耀き能く眼の鏡に映ふ、睫の光と眼の光と、二光相交て、空中の雲を照す、毛筋よく揃つて、長ひ短ひの別をなさず、斜に伸て曲み捻け醜しきをなさず、眉の下眶の表に、三種の畫采がある、畫の筋紫摩金色にして、眶の表より裏に徹り、金色の光りきら〳〵〳〵、青白の眼を照す、時々眶を動して、瞬きしたまふことあり、その度々に畫の筋右に旋て、青こ黄こ赤と白と四色の光明、ぴらぴらつぴらぴらつと閃き耀ぐ、その光り眶の内を潛りて、眉骨の筋の間だに隱入る、その光りまた眉骨を潛りて、眉の毛先及び睫の毛先に、丸く現れ止りて、一々玉の狀ちを作す、宛も朝の草葉に殘す玉露の如し、青き玉露の光りは、黄

色に映ひ、赤き玉露の光りは白きに映ひ、青黄赤白の艶、互に照し互に耀き、四種の色美く相交る、また一種の光明枕骨たり流出て、前の四色の玉露を遶る、遶ること四帀して終る、その時青黄赤白の色分明分れ、場所を別々にして空中に鬘く、その鮮かなること大空に向て、四筋の虹を分ち眺が如し、青色の虹の中より化佛を顯す、佛身一色は金精、黄色の虹の中より化佛を顯す、佛身の色は黄金、白色の虹の中より化佛を顯す、佛身の色は白銀、赤色の虹の中より化佛を顯す、佛身の色は砗磲、この四佛足に四色の蓮花を蹈み、身に四色の光明を放ち、圍遶尊重こ恭しく、本佛の首りの髮を遶りて、或は甚深の妙法を演べ、或は種々の神通を現したまふ、さてこの佛の睫は、上下俱に齊く美く生揃ふて、毛筋至て細く、譬へば優曇花の鬚の、小筋なるが如し、毛の數五百、毛先の一々より小

筋の光を流す、毛の艶時々玻瓈の光を放て、前の四色四光の化佛を遶る、五帀七帀遶〳〵て、終に化佛の相好の中に隱れ入る、また其光り四色の光明の中より現れ、本佛の首りの髮を遶りて枕骨を潛り前の四色の光明を遶て、諸の青き蓮花を顯す、その蓮すの花の臺に大梵天王現れたまひ、青き花の天蓋を捧て、佛の頭上の肉髻を覆と恭しく禮拜尊重したまふ、また雙べる眥頭より、二種の光明が赫ぐ右に旋て青き蓮花の狀ちを作す、その花眼の鏡に映ふて、鮮かなること一々筆を採て、眞體を畫けるが如し、青き蓮花の狀ちを、眼中に畫き顯すが故に、之を青蓮の御眼と云ふ、念佛の行者淨土に往生して、七寶の階に跪き、金山王の佛體に向ひ、大悲の尊顏を拜し奉るとき、完爾と微笑を含せられ、青蓮の御眼に、觀喜の淚だを溢したまふ、この眼この青蓮花より、紺瑠璃の光明が耀ぐ、その光り頭

上の、八萬四千の髮毛を旋り、一匝して枕骨を潛り、再び閃き現れて、寶林寶樹の花を照す、その照す時諸の花彌々鮮かにして、青ひ花には青ひ光りを放ち、黃なる花には黃なる光りを放ち、赤ひ花には赤ひ光りを放ち、白ひ花には白ひ光りを放つ、この諸の光り佛の睫及び眶を照して、終に青蓮の御眼の中に隱れ入る、觀念の行者、この佛の眼睫を觀ず已りて、無量の福を得、罪障おのづから消滅して、涅槃の京に至る、

第六に眼精紺白分明相

○大般若經に云く、眼晴て紺青鮮かなり、白紅間へ飾りて、皎潔分明なり、○觀經に云く、佛眼は四大海水の如し、青白分明なり、○觀佛經に云く、佛眼は花及び紺瑠璃に勝ること百億万倍、上下俱に眴くは、牛王の眼の如し、○往生要集に云く、眼より光明を出す分

て四支とす、遍く十方無量の世界を照すに、青光の中に於て、青色の化佛あり、白光の中に於て、白色の化佛あり、此青白の化佛、また諸の神通を現ずたまふ、○觀佛經に云く、佛眼の兩光その明遍く照して、諸佛の眼に入る、虛空の中に於て、化して光りの臺となるその光臺の上に、純ら是れ光りの雲あり、光雲の青白世界に比ひなし、青光の中に於て、青色の化佛ましまし、白光の中に於て、白色の化佛まします、この青白の化佛、左右に分明せり、百寶色の光りを以て其雲を爲す、身の諸の毛孔は、猶し花樹の如し、諸の花葉の間だに、百千億の聲聞比丘あり、一々の比丘千納の衣を着す、千納に千色あり、一々の色中に百千の化佛あり、皆純金色なり、是の諸の比丘、身を雲中に踊らして、亦た佛後に隨ふ、大龍象の行ごき、その子之に從ふが如し、○又云く閉目端坐し、正く佛眼を觀じて、一

日より七日に至らば、未來世に於て、常に佛を見ことを得、終に盲冥ならず、亦邊地邪見、無佛法の處に生ぜず、惠眼恒に開けて、愚癡を生ぜず、是故に智者盲冥を除んが爲に、當に佛眼を觀ず、

この第六の相好、眼精紺白分明相と云は、如來樣眼の莊嚴のこと眼こ晴て紺青鮮かなり、天に一塵の曇りなく、鮮かに晴渡たを眺めて、諺さに蛇の目を灰汁で洗たやうなこ云、今佛の御眼を之に例して云はゝ、蛇の目を灰汁で洗たやうなこ云が如く、一塵の曇り在ず、明かに晴れ一點の障りなく妍く澄り、或は佛眼は四大海水の如しこ、眞身觀に說てある、六十萬億那由他恒河沙由旬の廣大身を現じたまひし、佛の御眼は、人界四洲の海を、一ケ所に集めて、一目に眺るが如く、廣博に美く拜したまふ、白紅間へ飾りて、皎潔分明なり、人間御互の眼は、正中に目の玉があり、その周を黑眼にこ云

その周を白眼と云、佛眼は黑眼と云所が、紺青紺瑠璃の色、目の玉と周の紺青と、外側周の白と、その境ひ〳〵を正圓に緣を採り、緣探筋至て細く、紅色の艶を具へて、青と白との色に映ふ、之を白紅間へ飾ると御說なされた、青白分明と御眼この、白き所は彌々白くして、白寶に過たること百億萬倍、白寶は正白の艶を具へた寶の玉のこと、青き所は彌々青くして、青蓮花及び紺瑠璃に勝ること百億萬倍、青蓮花は青き蓮すの花、紺瑠璃は紺青の艶を具へし、瑠璃の玉のこと、又た目の玉上下自在に眴く、猶し牛王の眼の如しと、比例して御說なされた、眴したまふこと青白の色より、ばーつと光明が赫ぐ、その光り四支に分れて、遍く十方無量の世界を照す、青き光りの二支より、青き化佛を出し、白き光りの二支より、白き化佛を現す、その青と白との化佛、空中を自在に歩み飛で、種々の神通

を現じたまふ、また青白の光明、本佛の眼より飛現れて、空中に懸り、ばーつと散けて、十方世界を照し、漸々に相集りて、十方諸佛の眼中に隱れ入る、その光りまた諸佛の眼中より、閃き現れて空中に懸り、化して金剛の臺となる、その時光り追々と層を增て、大風に黑雲を引起すが如く、普く一天を埋む、きり〳〵〳〵〳〵回ひ下りて、金剛の臺を覆ふ、その體高山に雲を掛て、一面にその峯を、包みたるが如くに見ゆ、その雲また青と白く、二色二光を放つ、二種の雲左右に分れて、青き雲は百千の、青き化佛を現し、白き雲は百千の、白き化佛を現す、青白の化佛、右と左りに分れ列なりて、百寶色の光明を放ちたまふ、その光りまた百寶色の雲となる、或は諸の化佛の身の毛孔より、寶の樹を現す、その樹き枝と枝とが入違ひ葉と葉が相望み、花と花とが相順ひ、果と果が相當る、その枝葉花

果の間だ〳〵に、百千の菩薩聲聞大比丘衆が現れて、身に千納の衣を着す、一千の縫目あるを千納と云ふ、一千の縫目に一千の色あり色の一々より百千の化佛を現す、化佛の御身は悉皆金色、其菩薩大比丘衆は、空中に踊り上て、金色化佛の後に順ひ、寂かに虚空を行たまう、猶し龍王象王の道を行こと、その眷屬之に從ふが如し、さてこの佛の御眼を、青白二種に分て、無量の衆生に拜せ玉ふは、悲智の二門を御示なさる、千眼觀音は一千の眼を並べ現して、諸の衆生に拜せたまふ、此は衆生濟度に付て、種々に善行攝化の數あることを、眼の用きに寄て現したまひたものである、世間に於て人物の好惡を考へて、その氣象を辨へ知を、あの人は目が高ひとか、よく目利たとか、よく見込だとか云、此は心の用を目に寄て云た詞ば、考へ害ひしたことを、見込違でありたとか、目鏡違でありたとか云

欲情に道を忘れたことを、欲に目が開んとか、欲情に眼を暗んたとか云、これまた心の所作を目に寄て云た詞、或は聞て見よ嗅で見よ喰て見よ考て見よ、問て見よ尋て見よ、掛引て見よ働て見よ、此等は眉の下の、兩眼球の所作ではなけれども、眼を以て黑ひ白ひを、見分るに準へて、聞も嗅も喰も思も、問も尋るも掛引も働くも、みな見よ〳〵眼の所作に寄せて云ふ、今觀世音菩薩が、本師彌陀の大悲心より、衆生濟度のために、千辛萬苦と種々に善巧方便を、回らして御覽遊す故、衆多の眼を以て、四面八方を見が如くぞよと、一千の眼を顯して、之を衆生に拜せたまふ、今阿彌陀如來は眼の玉に青白二種の色を顯して、悲智の二門を御示しなさる、悲智とは慈悲と智惠との二つ、青きは慈悲白きは智惠、瞋恚の強ひ者は、眼が赤ひ赤は火の色、火はよほど勢ひの強者、瞋恚の煩惱を起すと、血眼

こになりて顔に紅色を含む、之を瞋恚の火花を散すと云、故に火の色の赤を以て瞋恚を表す、瞋恚の裏が慈悲情け、慈悲心の深ひ者は眼こが青ひ、凡て目前の事物に當て思ふて見なされ、青き色を成たるもの、十に八九は必ず柔かな、草木より新芽を生ずるを青々と云青々は青ひと云こと、新芽は青くして且つ柔かなもの、故に青きを以て慈悲柔軟を示す、又た愚痴な者は眼こが薄黑、黑きは闇の色、愚痴な者は物の道理に暗ひ、故に闇の色即ち黑きを以て愚痴を示す愚痴の裏が智惠、智惠の勝れた者は、眼こが白ひ白は明りの色、智惠が勝れておると、物の道理に明ひ、故に明りの色白を以て知惠を示す、今阿彌陀如來は、三世諸佛の本師御師匠、如來の智惠海は、深廣にして涯底なし、二乘の測る所にあらずと御說なさりて、佛の御智惠の廣大なことは、聲聞緣覺の知識を以て、その際涯を知たま

ふことは出來ぬ、又た佛心とは大慈悲是なり、無緣の慈を以て、諸の衆生を攝すと御說なさりて、佛の御慈悲の深ひことは、聲聞菩薩の及ぶ所にあらず、かやうに其れ阿彌陀如來は青白分明と、慈悲と智惠とを眼に顯して、無量の衆生に知せたまふ、青き所はいよ〳〵青し、白き所はいよ〳〵白し、青きより青き光りを放て、青き化佛を現し、白きより白き光りを放て、白き化佛を現したまふ、白き化佛は白き蓮花に端坐して、阿彌陀如來の智惠の功德を御說なされ、青き化佛は青き蓮花に乘せられ、阿彌陀如來の慈悲の功德を御說なさりて在す、此が青と白とを以て、智惠と慈悲との、瑞相を御知せ下さるゝ、觀念の行者坐禪の膝を組み、心寂かに眼を閉て、この佛眼の青白の功德を、觀念すること一七日に至らば、未來世に於て、佛の出世に出逢ひ、生身の相好を拜み、佛の直々の說法を聽聞して、

邪見邪惡の心を起さず、速に愚痴の煩惱を亡し、智惠漸々に開け、慈悲心胸に增長して、勇く佛道修行にかゝり、終に證りに至るそよと、觀佛三昧經に御說なさりてある、

第七に四十齒齊逾雪相

○往生要集に云く、四十の齒齊ひ、淨密にして根深く、白きこと珂雪に逾て常に光明あり、その光り紅と白と、人目に映ひ耀げり、○觀佛經に云く、口に四十の齒あり、印上光りて生ず、其光り紅白にして、光々相照す、○又云く齒間に文畫あり、諸光を流し出して、亦た紅白の色をなす、○觀念法門に云く、齒白齊密にして、白きこと珂月の如し、內外に映ひ徹る、○大論に云く、諸齒等し麁なく細なく出ず入ず、齒密の相人知されは謂て一齒とす、齒間に一毫を容ざるなり、○觀佛經に云く、師子欠相とは、佛口を張たまふとき

獅子王の如し、口方正等にして、口の兩吻の邊より、三光を流し出す、その光り金色なり、○又云く唇色赤好にして、頻婆果の如し、下唇鉢頭摩花の莖の如し、その色紅赤にして、上頻婆果の色中に入る、○又云く上唇に八萬四千の畫あり、了々分明なり、下斷優曇鉢花の莖の色の如し、○又云く上下の唇と、及び斷腭とに於て、和合光りを出す、その光り團圓にして、猶し百千の赤眞珠を貫けるが如し、佛口より出でゝ佛鼻に入る、佛鼻より出でゝ白毫に入る、白毫より出でゝ、諸髮の間だに入る、髮間より出でゝ、圓光の中に入る、○大經に云く、口氣香潔にして、優鉢羅花の如し、身の諸の毛孔より、栴檀の香を出す、その香ひ普く無量の世界に薰ず、

この第七の相好、四十齒齊逾雪相と云は、如來樣の口中に並ぶ齒の莊嚴のこと、御互に人間の口中には、上下三十二の齒を揃へて、

よく一切の食物を嚙碎く、佛の口中には上下合せて四十の齒。齒骨大丈夫にして、齒の根殆んど深く、齒の狀ち正四角に現れて、能く齊ひ揃に揃ふて、長ひ短ひの高卑なし、出入り曲みの醜しきをなさず、白きこと珂雪に逾ゆ、珂は白き碼磁雪はゆきのこと、齒の色艶こ白き碼磁を磨き立たる如く、或は日光を以て、雪の白きを照すが如し、內外映徹こ、內外つきこほして耀ぎ光る、齒の一々にぼち〳〵の點相がある、紅こ白この光りを生じて、光りと光りと互に相照す、諸の衆生佛の御齒を拜み奉るこき、この二色の光明赫ぎ來て拜む衆生の眼中に入る、齒こ齒こ並ぶ境ひの合に、種々の紋りがある、その美さは筆を以て、一々畫けるが如し、畫の筋にまた光りあり、紅こ白この色を作す、或は齒密の相こ云て、四十の齒別々に並ぶといへども、齒こ齒の間だがよく就合、一齒の如くに見ゆる、或

ひは師子の欠相、佛口を張て欠を作たまふこき、師子王の口の如く竪横正に等し、口の兩吻より三筋の光明が閃き飛で、齒の白きを照す、或は唇色赤好の相、佛の唇は上の片は、正赤にして頻婆果の如し、頻婆果はよほど、赤き艶を具へた果のこ見へる、唇の下片は鉢頭摩花の莖の如し、鉢頭摩花は紅ひ蓮の花、唇の下片に耀く紅の光明が、上片の頻婆色の中に隱れ入る、或ひは上脣の相、上の脣に八萬四千の畫ごりがある、了々分明こ畫の筋が、はつきり分れて光り赫ぐ、或は下斷の相、下の斷の色、優鉢曇花の莖の如し、優曇鉢花は青ひ蓮すの花、或は二唇斷脣放光の相、此は上下二枚の唇こ、上の脣と下の斷と、この三所より赤き正圓な、光明續き現れて、百千の赤眞珠を、繫ぎたるが如くに見ゆる、その赤眞珠の光り、佛の口より飛現れて佛の鼻に入る、その光りまた鼻より飛現れて白毫に入

る、その光りまた白毫より飛現れて、頂上て髪毛の間だに入る、その光りまた髪毛の間だより現れて、項の圓光の中に入る、鼻の莊嚴と光明、鼻より現れて玻瓈の山を作す、山の間だに蓮花を生ず、蓮花の上に金色の水を流す、白毫は眉の間だの白き毛、雪の艶を備へ八角にして中は空ら、舒れは白瑠璃の筒に見へ、縮れば右に旋て、綴し玻璃玉の如し、常に七寶の光りを放て、面部一切を照す、頂上の髪はその數八萬四千、紺青の色を具へて、右卷に回込み、その狀ち螺の如し、之を螺髻と云ふ、常に紺瑠璃の光明が顯るゝ、圓光は項ドにあり、正圓に耀て日輪の如し、百千萬億の閻浮檀金の色を作す、前の赤眞珠の繋き玉閃き耀き、佛の口より飛現れて、顏の正中を通り、鼻の光りの玻瓈の山を潛り、蓮花の上の金色の水を渡り、白毫の白瑠璃の、筒の中を通り抜け、七寶色の光明を貫き、頂上の

八萬四千の紺青の髪、卽ち螺髻の間だを潛り、その螺髻より放つ、紺瑠璃の光明を過て、終に閻浮檀金色の、圓光の中に隱れ入る、是の如き等の神變、不思議の所作は、皆是口中に並ぶ、四十の齒隨好の莊嚴である、口氣香潔にして、優鉢羅花の如し、佛の口中より優鉢羅花と云ふ、青蓮花の香を散したまふ、その香ひに隨て身の諸の毛孔より、栴檀沈水の芳りを放つ、その異香紛々として、十方無量の世界に薫じ渡り、有緣の衆生の唇に入り、心の穢れを洒で清め、終に佛道修行の善心を、生ぜしむる等の所作、みなこれ佛の口中に並ぶ、齒相功德の御利益なり、

第八に四牙鮮白鋒利相

○往生要集に云く、四牙鮮かに白く、光り潔くして鋒き利し、月の初て出るが如し、○大論に云く、牙白の相、雪山王に勝る、○大般

若經に云く、諸の牙圓かなり、白光潔よく漸次に鋒き利し、○大論に云く、諸佛の法必ず衆生の與に、授記せんと欲するに、先づ皆微笑して、無量種々色の光明を、その四の牙の中より出したまふ、所謂青黃赤白縹紫の色等なり、上二つの牙より出る光りは、三惡道を照す、その光り即ち微妙の法を說く、衆生光りに遇法を聞ものは、身心安樂を得て人天に生ず、下二つの牙より出る光りは、人天乃至有頂を照す、六欲の天人阿修羅等と、五欲の樂を得て佛所に詣す、色界の天人は禪樂を得、また普く六道を照して佛事を作す、而して還て佛身を繞こと七帀す、若し地獄を記するには、光り足下より入る、畜生を記するには臍より入り、餓鬼を記するには脛より入り、人を記するには臍より入り、天を記するには胸より入り、聲聞を記するには口より入り、辟支佛を記するには眉間より入り、諸佛を記

するには頂きより入る、若し授記せんと欲するには、必ず先づこの相を現すとなり、○觀經に云く、爾時世尊即便ち微笑したまふに、五色の光りありて佛の口より出づ、一々の光り頻婆娑羅の頂きを照したまふ、爾時大王幽閉に在と雖も、心眼障りなく遙かに世尊を見奉て、頭面に禮を作す、自然に增進して、阿那含を成す、○序分義に云く、佛の光りは身の出處に隨て、必ずみな益あり、佛の足の下より光りを放てば、即ち地獄道を照益す、若し光り膝より出れば、畜生道を照益す、若し光り陰藏より生れば、鬼神道を照益す、若し光り臍より出れば、修羅道を照益す、若し光り心より出れば、人道を照益す、若し光り口より出れば、二乘の人を照益す、若し光り眉間より出れば、大乘の人を照益す、今この光り口より出て〻、直ちに王頂を照すは、即ち其小果を授ることを明す、若し光り眉間より

出で、佛頂に入ものは即ち菩薩に記を授るなり、

この第八の相好、四牙鮮白鋒利相と云は、如來樣の牙の莊嚴である、佛の口中には上下四本の牙を並ぶ、これまた正白にして齒の色と齊し、鋒き尖りて三ヶ月の狀ちを作す、その牙丹花の唇に傍て長く秀て、色艶の妍しきは日光を以て、雪の白きを照すが如し、きら〳〵白光りに光る、牙を生せし生物は、畜生中に衆多おる、勢ひ烈くして人必ず恐る、威德鬼勢力思なご云る餓鬼は、みなこれ恐しき牙を生して、人間畜生を引副食ふ、地獄の阿房羅刹は、牙の先より常にぼろ〳〵〳〵炎を流す、凡て迷の世界て牙の生たるは、必ず恐しきものに限る、然るに佛の口中に並ぶ、四本の牙は之に反して、大慈大悲の御心より現したまふ、衆生濟度の妙莊嚴、その功德よほご廣大無邊に在す、阿彌陀樣には限らず、凡て十方一切の諸佛

世尊、この牙の功德を以て、衆生濟度したまふこと尠からす、先づ天眼遠見力の眼こを發して、十方世界を打眺め、有緣の衆生が目に當ると、あー嬉しや濟度してやろうと、歡喜胸に溢れて、莞爾と微笑を含みたまふ、その時牙の先より光明が耀く、その光り青黃赤白縹紫なご、其他七寶百寶無量百千種の色を分て、有緣の衆生を御照しなさるゝ、その利益大に分て二とす、一には上二本の牙より放つ所の光明は、づゝつご地獄餓鬼畜生の、三惡道に飛下る、光りの筋忽ち化して、大悲の音聲となる、其響き高々ご、甚深微妙の大法を說く、罪人その法をきゝ、その光りを拜むご、身心の苦み追々輕ド見光聞法の功德に由て命終るなり、或は人界に生ド或は天上界に生を受て、佛道修行にかゝり、終に涅槃の証りに至るこある、此を大經には若し三塗勤苦の處に在て、此光明を見れば、皆休息を得て、

復苦惱なし、壽終の後皆、解脫を蒙ると御說なさりた、次に下二本の牙より、出る所の光明は、或は人界の四洲を御照しなさる、或は欲界の六天、色界の十八天等こ、四面八方に散けて、人間天人を御照しなさる、因緣ありてこの光明の、御照しを蒙ると、忽ち無上菩提の心を起し、佛道修行にかゝりて、終に證りに至るとある、この牙の光明普く、十方無量の世界に充々渡り、衆多の衆生を御濟度なさる、濟度の化緣盡ると、光明端から本國に回ひ戻り、佛身を旋りて相好の中に隱れ入る、善巧の攝化一樣ならず、濟度の所對に由て光明の隱れ場が違ふ、地獄の罪人を濟度の光明は、御足の千輻輪の中に隱れ入る、畜生濟度の光りは腨より入り、餓鬼を濟度の光りは脛より入り、人間濟度の光りは臍より入り、天人濟度の光りは胸より入り、聲聞濟度の光りは口より入り、緣覺濟度の光りは眉間より

入り、諸佛菩薩を御照しの光明は、頂上肉髻の中に隱れ入る、此が佛の牙より放たまふ、相好光明の御利益である、或は光明の出所に由て、濟度の場所が違ふ、足より光明を放たまへば、地獄道を御照しなさる、膝より放てば畜生道、陰藏より放てば餓鬼道、胸より放てば人界、口より放てば、聲聞緣覺、眉間の白毫相より放つて、佛の頂上肉髻の中へ隱れ入の、光明は大乘歷々の菩薩へ記を授けたまふと、序分義の中に御示しなされてある、又た觀經の會坐に於て、釋迦如來完爾こ微笑を含せられ、口中の牙の先よりパーつこ、五色の光明を御放ちなさりた、其光り一々頻婆沙羅王の頂きに止り、ぴかく〳〵〳〵動暫く御照しなさると、不思議なる哉大王の身は、眞黑の牢獄の中に在乍ら、心眼障りなく開けて、世尊の相好を、ありく〳〵こ拜せて御貫ひなさりた、あゝ勿體なひ〳〵こ渴仰肝に銘じ、

べつたり、大地にひれ臥して、佛足を押頂き、三拜九拜の禮を作て、自然增進と、信心堅固に增長せられたら、直ちに阿那含の、證りを御開きなされたとある、此は釋迦如來の、牙より御放ちなさりた、五色の光明の御利益なり、

第九に舌相廣長覆面相

○大般若經に云く、舌相は薄淨にして廣長なり、能く面輪を覆つて耳の髮際に至る、○往生要集に云く、舌の上に五の畫あり、猶し印文の如し、唉の時舌を動して、五色の光りを出したまふ、佛身を遶ること七匝して、還て頂きに入る、○觀佛經に云く、舌相の光りの中に諸の化佛まします、化佛の光り一の銀山となる、其山高大にして、純ら銀樹を生ず、金花銀花の樹下に、皆白玉の蓮花あり、花の上に復た白玉の化人あり、中略亦た舌相を出す、一の光あり東方を照す、東方の地をして皆金色なら令む、金光の端に諸の化佛まします、佛々相次で乃ち東方の無量世界に至る、譬へば稻麻の間だに空缺なきが如し、一佛に皆無量の菩薩あり以て侍者とす、是の諸の菩薩、亦た舌相を出して、佛と正に等し、無量の光明化して光雲となる、光雲の中に於て、微塵の如き等の、無量の化佛ましまして、亦た舌相を出す、一の光あり南方を照す、南方の地をして瑠璃の色なら令む、瑠璃の地上に、黃金の花を生ず、黃金の花の上に、碼碯の花を生ず、碼碯の花の上に、硨磲の花を生ず、硨磲の花の上に、珊瑚の花を生す、珊瑚の花の上に、琥珀の花を生ず、是の諸の花の上に、無量の化佛ましまして、亦た舌相を出す、一の光あり西方を照す、西方の地をして玻瓈色なら令む、玻瓈の地上に、金剛の雲あり金剛の雲の中に、白寶の雲あり、白寶の雲の中に、赤眞珠の雲あり

赤眞珠の雲の中に、白眞珠の雲あり、白眞珠の雲の中に、紫眞珠の雲あり、紫眞珠の雲の中に、綠り眞珠の雲あり、綠り眞珠の雲の中に、紅眞珠の雲あり、紅眞珠の雲の中に、閻浮檀金沙の雲あり、閻浮金沙の雲の中に、金剛摩尼微塵の雲あり、金剛摩尼微塵の雲の中に、一切寶色微塵の雲あり、是の如く一々の雲の中に、五十六億の色あり、微妙にして鮮かに好し、中略亦舌相を出す、一の光りあり北方を照す、北方の地をして硨磲色なら令む、硨磲の地上に金剛の塔あり、一々の佛塔に、百千の妙塔あり以て圍遶す、一々の塔の中に復た百億の龕窟あり、一々の窟の中に、諸の寶色の水あり、自然に涌き出る、是の諸の水の上に大蓮華あり、開て光明を現す、その光り現る〻時、香氣微妙なり、海岸栴檀の香ひに勝ること百千萬倍是香ひ變じて、微妙の光明となる、その光明の中に、諸の化佛まし

ます身色微妙なり、一々の化佛亦た舌相を出す、一の光りあり東南方を照す、其地をして碼碯色ならしむ、碼碯の地上に琥珀の山あり琥珀の山の上に、七寶の林しを生ず、七寶の林しの間だに、十泉の水あり、水に十寶の色あり、水の色光りを放つ、光の照す所の處に大寶山あり、一々の山の間だに、摩訶曼陀羅花を生ず、花の臺の上に於て一の化佛あり、純ら瑠璃色にして、内外清く徹す、雜寶色の光り、身を遶ること千帀、一々の光りの中に、無量の化佛ましまして、亦た舌相を出す、一の光りあり西南方を照す、其他をして鈍ら珊瑚色なら令む、珊瑚の地上に碧玉の樓を生ず、樓に一億の柱ありー々の柱に百億の寶色あり、一々の寶ら無數の光りを放つ、一々の光り化して、無量千億の寶樹となる、一々の樹の下に六泉の水ありその水樹の根より入り、樹の條より出づ、流れ出る時六寶の色あり

一々の水の中に一の蓮華を生ず、その花鮮かに白く、花の上に復た一の化佛まします、その身極て白し、白色の上に五百の色あり、微妙の光明佛身を圍遶す、一々の光の中に無數の化佛まします、青色の化佛は、珊瑚の地上に在て經行したまふ、白色の化佛は、青玉樓の上に在て經行したまふ、是の如く無數の化佛ましまして、亦た舌相を出す、一〻の光りあり西北方を照す、その地をして琥珀色なら令む、琥珀の地上に、眞珠の山を生ず、眞珠の山の上に、珊瑚の樹あり、白玉の葉摩尼の花、黃金の果金精の鬚、樹の下に大師子あり其身七寶なり、師子の眼の中より、大光明を放て、琥珀の地を照す琥珀の地をして、一大蓮花を生ぜ令む、一々の花の上に、光明の雲あり、その雲紫色なり、青黃赤白の光りを放つ、一々の光りの中に無數の化佛ましまして、亦た舌相を出す、一の光りあり東北方を照す、その地をして純ら金剛色なら令む、金剛の地上に花を生ず、七寶を以て合成す、花の上に幢を生ず、閻浮檀金の色、幢の頭に花あり、其花無量百千の寶色、無數の葉あり、一々の花葉化して、無量百千の寶帳となる、一々の帳りの角に七寶の幢あり、一々の幢の頭に七寶の蓋あり、蓋に五の幡あり、純ら黃金を以て成る、幡に萬億無量の寶の鈴あり、鈴より妙音を出して、佛名を讃歎す、讃歎佛を念ず、讃歎懺悔す云云、

この第九の相好、舌相廣長、覆面相と云は、如來樣の舌の莊嚴である、佛の舌は至極薄くして、幅廣く竪長し、ずーつと之を舒したまへば、面輪を覆ふ、面輪とは御顏のこと、ひつたり顏を覆つて、耳の葉及び額の髮の生際まで屆く、表裏俱に淨く、五種の畫採がある、有緣の衆生に對せられ、已に御說法なさらんと思召す時、歡喜

の思ひ柔輭大悲の御顔に溢れ、完爾と微笑を含で舌を舒べ、びつたり御顔を覆ひたまふ、その時舌相に現す、五種の譬採の一々よりパーつと、赤青白黄紫の、五色の光明が耀ぐ、その光り佛の御身を、七返旋りて御首の頂き、肉髻の中に隠れ入る、莊子の中に、搖唇鼓舌擅生是非と書てある、人間御互の舌は僅に三寸、この三寸の舌を以て、大善事も引起し、大惡事も引起す、善人の舌はよほど貴ひもの、惡人の舌は實に恐るべきもの、佛は大慈大悲の御主ド、善根功德の大法王、依て佛の舌相は、無量の衆生に、無量の法を説て聞せて、永ひ迷ひの苦惱を轉ド、永ひ證りの大安樂を與へたまふ、實に廣大無邊、大必用の相好である、其でこの舌相と説法の度々に、種々の神變不思議を顯したまふ、その説法莊嚴の摸様を、觀佛三昧海經に、永々と御説なさりてある、其あらましを揭抓て御話し致さば

先づ佛け廣長の舌相を出して、説法したまふ時、パーッと大光明が耀ぐ、その光りの中に百千の化佛が、續々生じ現れたまふ、一々の化佛また身より光明を放て、乍ち銀の山を作り現す、その山正白にして、春の雪日光に耀くが如く、高く空中に聳へて、白光りに光り耀ぐ、その山の半腹に、數千本の樹を並ぶ、金銀の花鮮かに開て、佛身の金色に映ふ、樹の下に白珠の蓮華あり、花の上に白珠の化佛を現す、諸の化佛廣長の舌相を出して、また説法したまふ、舌相より一種の紫摩黄金の、光明耀き現れて、東方の空中に數き渡る、その時東方に並ぶ、衆多の世界その光りに照されて、乍ち紫摩黄金の大地となる、その黄金の地上より、諸の化佛次第に續き現れて、無量の世界に身を配、有緣の衆生を度したまふ、この化佛榮へし稻麻を並べたるが如く、群り集て黄金の地上、及び光明の空中を歩み行

く、一々の化佛無數の化菩薩を以て侍者こす、この諸の菩薩空中に向て光明を吐く、その光り化して金色の雲となる、雲の中に無量塵數の化佛在す、同く廣長の舌相を出して、甚深の妙法を說演たまふ一種紺瑠璃の光明、舌相より耀き現れて、南方の空中に鬚き渡る、その時南方に並ぶ衆多の世界、その光りに照されて、乍ち紺青紺瑠璃の大地となる、その紺瑠璃の地上に、黃金の花鮮かに咲亂れ、その黃金の花の上に、碼碯の花を生ず、碼碯の花の上に、珊瑚の花を生ず、珊瑚の花の上に、琥珀の花を生ず、この諸の花の上に、無量の化佛出現在す、その化佛また廣長の舌相を出して、甚深の妙法を說たまふ、一種の玻瓈の光明、舌相より耀き現れて、西方の空中に鬚き渡る、其時西方に並ぶ衆多の世界、其光りに照されて、乍ち玻瓈の大地となる、その玻瓈の地上に、金剛の雲俄かに浮び現る、

漸々に空中に上りて一天に鬚く、その金剛の雲の中に、白寶の雲あり、白寶の雲の中に、赤眞珠の雲あり、赤眞珠の雲の中に、白眞珠の雲あり、白眞珠の雲の中に、紫眞珠の雲あり、紫眞珠の雲の中に綠り眞珠の雲あり、綠り眞珠の雲の中に、紅眞珠の雲あり、紅眞珠の雲の中に、閻浮檀金沙の雲あり、閻浮檀金沙の雲の中に、金剛摩尼微塵の雲あり、金剛摩尼微塵の雲の中に、一切寶色微塵の雲あり是の如く一々の雲の中に、五十六億の色あり、その色詳かに光りを放ち艶を閃かして、千萬里の虛空を埋む、また無數の化佛在して、廣長の舌相を出し、種々の妙法を演たまふ、一種の硨磲の光り舌相より現れて、北方の空中に鬚き渡る、其時北方に並ぶ衆多の世界、その光りに照されて、硨磲色の大地となる、硨磲の地上に金剛の塔あり、塔は四角四面の立物、二重の塔は四角の堂に棟を二つ重ぬ、

或は三重の塔五重の塔七重の塔、其塔の一々をあまたの、小き妙塔を以て圍み飾る、或は又一々の塔の中に、百億の龕窟がある龕窟は山谷崖等の聳へ横はる岩の洞窟のと、併し世間の洞窟は其質石の大なるもの、今龕窟とあるは、金銀七寶の岩、高く塔の中に聳へ、一々にあまたの洞窟を揃へ並ぶ、その中に五色八色百寶色の水、浮々と湧上る、その諸の水の中に、衆多の蓮すの苔みを生ず、苔み開くと同時に、異香紛々と妙なる芳りを散す、その香ひ栴檀香木に勝ることの百千萬倍、芳り化して光りとなる、光りの中に無數の化佛在す、亦た廣長の舌相を出して、説法教示したまふ、一種の碼磁色の光明、舌相より現れて、東南方の空中に鬚き渡る、東南方に並ぶあまたの世界そ、の光りに照されて、乍ち碼磁色の大地となる、その碼磁色の地上に、忽然と琥珀の山を現ず、高く空中に聳へて光りを放つ、

その山の頂き及半腹麓に、金銀瑠璃玻瓈硨磲、珊瑚琥珀の林を立並ぶ、その七寶の林の間だに、十種の泉み洵々と湧出る、その水十種の寶の色を具へて光りを放つ、その光り地上に散け空中に鬚て、或は金銀瑠璃の山を作り、或は珊瑚琥珀の谷を作す、その山谷の間だに、摩訶曼陀羅の花鮮かに開て、異香紛々の芳りを放つ、その花の臺に諸の化佛在て、身内身外俱に清く、純ら紺瑠璃の色を作す、五色八色百寶色の光明、四面八方より起りて佛身を繞る、繞ること千帀にして、無量無數の化佛を現す、その化佛また廣長舌相を出して、微妙の法を説述たまふ、一々珊瑚色の光明、舌相より耀き現れて、西南方の空中に鬚き渡る、その時西南方に並ぶ衆多の世界、その光りに照されて、乍ち珊瑚色の大地となる、その珊瑚色の地上に玉の樓閣を現す、その色碧り、樓閣の柱その數一億、一々の柱百億

の寶の色を作す、一々の寶無數の光りを放つ、一々の光り化して寶の樹となる、一々の樹の下に、六種の泉み涬々と沸出ること、猶し煮湯の玉、釜の中に飛が如し、この水樹の根を遶り、水氣枝に上りて葉を潤す、一々の葉先一々の枝先より、玉の滴くを飛すこと雨の如し、その玉の滴く六色の光りを放つ、その光り地上に流れて六色の水となる水の流るゝ所に、蓮花美く咲亂れて水に映ふ、花の色鮮かに白く、その花の中に忽然と、白き化佛を現す、五百の寶色ありて佛身を飾る、猶し天の畫の如し、畫の一々より妙なる光明を放て佛身を遶る、その光り青黄赤白等の色を分つ、青き光の中に、青き化佛在す、この化佛珊瑚の地上を歩み行く、白き光りの中に、白き化佛在す、この化佛青き樓閣の上を歩み行く、是諸の化佛、また廣長の舌相を出して、微妙の法を演たまふ、一種琥珀の光明、舌相より耀き現れて、西北方の空中に靉き渡る、その時西北方に並ぶあまたの世界、その光りに照されて、乍ち琥珀色の大地となる、琥珀の地上に、眞珠の山忽然と現はる、高く空中に聳へて光りを放つ、その山の頂きに、珊瑚の樹を立並ぶ、葉は白玉花は摩尼、果には黄金鬚は金精、樹の麓に七寶々色の獅子、何所ともなく來り現れて、琥珀の地上に跪づく、眼の中より金色の光を流す、耀き散けて琥珀の地を照す、そのとき忽然と生じ並ぶ、大寶蓮花の上に、紫きの雲を起す、その雲空中に靉て、青黄赤白の大光明を放つ、光りの中にまた無數の化佛在す、同く廣長の舌相を出して、甚深の法を說きたまふ、一種金剛色の光明、舌相より耀き現れて、東北方の空中に靉き渡る、その時東北方に並ぶあまたの世界、その光りに照されて、乍ち金剛色の大地となる、金剛の地上に、七寶の花鮮かに咲亂る、花

の上に閻浮檀金の幢を立並ぶ、幢の頭に五色八色百寶色の花を顯すその花化して寶の帳となる、一々の帳の角に七寶の幢あり、一々の幢の頂きに、七寶の天蓋高く懸る、天蓋の四面に、黄金の幡を飜す幡の下角に寶の鈴を垂る、その鈴種々の妙音を發して、佛の尊號を讚歎す、その讚歎の聲普く、十方世界にひゞき充つ、有緣の衆生是聲を聞て、自ら罪障を懺悔し、佛を禮し法を念ずて、無上菩提の心を起すなり

第十に常得上味適悅相

○大般若經に云く、舌根常に味中の上味を得る、喉脉直きが故に、能く身中の諸支筋脉に、所有上味を引く、○往生要集に云く、舌下の兩邊に二の寶珠あり、甘露を流し注で、舌根の上に適ふ、諸天世人十地の菩薩に、此の舌根なければ、亦た此の味ひなし、○觀佛經

に云く、舌の上に五の畫あり、寶の印文の如し、此の如きの上味、印文の中に入る、上下に流れ注ひで、瑠璃筒に入る、諸佛笑ふときこの舌根を動したまふ、此の味力あるが故に、舌より五の光りを出す、五色分明なり、佛を遶ること七匝、還て頂きより入る、○又云く舌下に亦た衆の雜色の脉あり、此の如きの上味、脉中に流れ入る其上味あるが故に、變ずて衆の光りを成ず、十四の色あり二光上りて、無量世界を照す一々の光りの間だに、一の光臺あり、その色殊妙具さに名くべからず、一々の光りの臺に征室無數、一々の龕の中に無量の化佛ありて、結加趺坐したまふ、聲聞菩薩皆悉く圍繞す、上方の無量世界を過ぎ、化して一佛となる、佛身高く顯れて須彌山の如し、是の如きの諸佛、その數無量なり、皆舌相を出すこと、亦復是の如し、二光下り照して阿鼻獄に至る、阿鼻獄をして、黄金色

の如くなら令む、佛の舌力の故に、受苦の人をして暫く、休息を得せ令む、○觀念法門に云く、舌根の下に二道あり、津液注で咽喉の筒に入り、直ちに心王に入る、佛心紅蓮花の如し、開而開かず合而合ず、八萬四千の葉あり、葉々相重れり、一々の葉に八萬四千の脉あり、一々の脉に八萬四千の光りあり、一々の光り百寶の蓮花となり、一々の花の上に一の十地の菩薩あり、身は皆金色、手に香花を持て、心王を供養す、異口同音に、心王を供養す、○觀佛經に云く佛心は紅蓮花の如し、蓮花の葉の間だに、八萬四千の諸の白色の光りあり、その光り遍く五道の衆生を照す、この光り出るとき受苦の衆生、みな悉く出現す、○大經に云く、若し食せんと欲するとき、七寶の盌器自然に前にあり、金銀瑠璃硨磲碼碯、珊瑚琥珀明月眞珠是の如きの諸盌、意に隨て至る、百味の飲食自然盈滿り、此の食あ

りこいへども實に食する者なし、但色を見香を聞き、意以て食せんとするに、自然に飽足る、身心柔輭にして、味著する所なし、

この第十の相好、常得上味適悅相と云は、如來樣の五味七味、乃至百味甘露の味ひを慰みたまふ、舌根の莊嚴である、舌根とは舌のこと、常に味中の上味を得と御說なさりて、御互人間とは違ふ、人間は口中に食物のある間だゞけ、その味が舌を悅ば令る、ぐつと呑だらもー味ひは失る、佛の舌には常に百味甘露の、味ひが流れ注でおる、又諸支筋脉に、所有上味を引と御說なさりて、その味ひが骨にも肉にも筋にも皮にも、ずーつと散け屆て實に快よく、亦たその味ひは人間御亘の如く、皿鉢等の器に盛立、箸を以て口中に持運ぶに非す、舌の兩邊に二つの寶珠かある、寶珠とは寶の珠なり、其珠より五味七味、乃至百味甘露の味ひが、自然と流れ注ぐ、この舌

根の寶珠は必ず佛に限る、人間天人は申すに及ばず、喩ひ地上の菩薩といへども、甘露を注ぐ舌根の寶珠は曾てなし、また舌の表に五種の畫採がある、印文の如しと云て、ぽつち〳〵と所々に配り並んでおる、其印文の畫より、味ひが流れ注て喉笛を越し、ついに腸の底に落入る、快よく五臓六腑の隅々まで、味ひが屆き散ける故、完爾と微笑を含みたまふ、その時舌の表の印文の畫より、ぱーつと五種の光明が耀く、その光り亦た青黄赤白紫の五色にして、はつきりと色艶を分ち、佛の御身を七返遶て、頂きの中に潜れ入る、又た舌の下片に、五色八色百寶色の脉がある、味ひその脉に注ぎ入て、四種の光りを放つ、一々の光りに十四の色あり、四種の中二種の光りは、上りて上方の無量世界を照す、その光りの間だ〳〵に、光明の臺が出來る、その臺の上に美き輦を顯す、その中に諸の化佛在す、

一々の化佛靜かに、坐禪の膝を組で、種々の妙法を說演たまふ、天に聲聞菩薩あり天下りて、その化佛を圍遶し、上方の無量世界を飛越て、各皆佛身を顯す、その姿た廣大にして須彌山の如し、各亦た大光明を放て、上方の無量世界を照す、次に四種の中、殘る二種の光明は、下に向て耀き下り、地獄餓鬼畜生の、三惡道を照す、この時無間地獄の釜底まで、紫摩黃金の色と轉ず、是即ち佛の舌根の、威德力なるが故に、苦患の衆生暫くその苦みを休で、歡喜の思ひを生ず、また佛の舌根の下片に、二筋の道がある、百種甘露の味ひ、その道筋より注ぎ流れて喉を越し、直ちに心の藏に入る、佛の心の藏は紅蓮花の如し、紅蓮花は赤ひ蓮の花、今や開んと欲する、蕾みの形ちを作し、八萬四千の葉を揃へ、葉の一々に八萬四千の筋がある、筋の一々に八萬四千の光りがある、光りの一々化して、百寶の

蓮花となる、一々の花の上に、諸の菩薩が忽然と現れ、香を焚き花を雨して、大慈大悲の佛心を御供養なさる、或は異口同音に聲を揃へて、大慈大悲の佛心を御讃歎なさる、その時佛の心の藏より、白き光明を放て五道の衆生を御照しなさるゝと、光明の神通力に由て苦患の罪人があり〳〵と光明の中に現はるゝ、此等の所作がみな、百種甘露の味ひを嘗たまふ、佛の舌根に具はる莊嚴相なり、御經の中に世間に、六種の食事ありと御說なさりてある、一に眼は見を以て食とし、二に耳は聞を以て食とし、三に鼻は嗅を以て食とし、四に舌は味ひを以て食とし、五に身は觸を以て食とし、六に心は思を以て食とすと、又た世間に四種の食ありと御說なさりてある、一に噉食、此は五穀野菜を食ひ、或は生物の肉を喰ふこと、その食喉を越て腹に入り、精氣は夫々、五體身分に散けて、骨になり肉になり

皮になり筋になり、血になり汗になり、脂になり垢になり大小二便となりて、この身體五臟を養ふ、二に觸食、此は人間なれば着物を拵て着る、鳥は羽獸は毛魚は鱗、或は甲類貝類、此等はみな外から包み纏て此體だを養ふ、三に念食、此は前に喰ひし食物の事を、一心に念ずて體だを持つこと、畜生にこの類が多ひ、龜蛇蛙蚓など、夏は食物を求めて喰へども、冬になると體だが凍へちゞけ、土の底水の中に潛みて、前に喰ひし食物の事を一心に念じ、其念力に由てやう〳〵に、鉢を持ち命を繫でおる、四に識食、此は喰ず呑ずで、體だを持し者、卽ち餓鬼道の罪人、十に八九はこの類である、第八の阿賴耶識と云に、前生の食事が染付、別段喰も呑もせぬのに、ドーつこ體だを持ておる、空腹ては叶はぬけれども飢死は致さぬ、亦た無色界の天人は魂ひ斗り、別に體と云一物はなひ、體だかなひ故

喰ことも飲こともできぬ、爾るに四萬大刧八萬大刧と云ふ、長ひ壽命を持ておる、識食と云ふ、第八識に染付た、食物の薫習力である又次に出世間に、五種の食ありと御説なさりてある、此は諸の菩薩羅漢大比丘衆の御方々が、身命を持たまふ所の食物なり、一には正念食、此は善根功徳を、一心に念ずるを以て食と作たまふ、二に法喜食、此は法の貴さを喜んで食と作たまふ、三には禪定食、此は禪定の修行を食と作たまふ、四に誓願食、此は種々の誓願を立てゝ食と作たまふ、五に解脱食、此は所得の證りを以て食と作たまふ、決して吾等凡夫の如く、着たり嗅だり喰たり飲だり、御食事はなひ、近く吾日本でその例を取て云はゞ、弘法大師や廣智法印の御入定、何千年何百年の星霜を經乍ら、喰ず飲ずでドーつこ、身命を保て在す、此が即ち出世五種の食物力と云もの、佛道修行の人師ですら其

通り、増て況や極樂の、本師の如來や國中の人天、十方來生の佛菩薩、各皆大般涅槃の証りの御身、不淨の食事をなさろふ樣はなひ、大無量壽經に、もし食せんと欲するとき、七寶の盌器自然に前にありと御説なさりてある、佛は食事の想を、心に思ひ浮べたまふと、乍ち七寶の器が、目の前に顯はるゝ、金と銀と瑠璃と玻瓈と、硨磲と明月と眞珠と、この七つの寶を以て作りし器、その中に五味七味乃至百味の飲食が、高々と盛立てゝある、けれども人間畜生の如く之を取喰ひたまふに非ず、但色を見、香ひを聞ぎ、意已に食せんとするに、自然に飽足る、身心柔輭にして、味着する所なしと御説なさりて、食物の美しき色を眺め、食物の結構な香ひを聞ぎたまふ時舌根の寶珠より、百種甘露の味ひが浮み現れて、舌に注ぎ骨身に散け屆て、身も心も寔に快よく在すが「常得上味適悅相と云もの、

第十一に梵音和雅等聞相

○往生要集に云く、如來の咽喉は琉璃の筒の如し、狀ち蓮花を累ねたるが如し、出す所の音聲は、詞韻和雅にして、等く聞へずと云ことなし、○大論に云く、如來の梵聲相は梵天王の如く、五種の聲口より出づ、一には甚深にして雷の如く、二には清徹にして遠く聞ゆ、聞者悅び樂む、三には心に入て敬ひ愛む、四には諦かに了解け易し、五には聽者厭ことなし、○往生要集に云く、その聲洪震にして、猶し天の鼓の如し、發する所の言は綩均にして、伽陵頻の音の如し、任運に能く大千世界に遍ず、若し意を作すときは無量無邊、然るに衆生を度せしが爲、類に隨て增減す、○正法念經に云く、山あり曠野と名く、その中に多く加陵頻伽あり、妙なる音聲を出す、是の如きの美音、若は天若は人、緊那羅等、能く及ぶ者なし、唯如

來の音聲のみを除く、○大論に云く、迦陵頻伽鳥の如きは、鷇の中に在て未だ出ざるに、聲を發すること微妙にして餘鳥に勝る、○大經に云く、梵聲猶し雷の震が如く、八音妙なる響きを暢ぶ、○新婆娑論に云く、如來の梵聲相とは、謂く佛の喉藏の中に於て妙大種あり、能く悅意和雅の梵音を發すること、羯羅頻迦鳥の如し、乃し深遠雷震の聲を發すること、帝釋の鼓の如し、○法界次第に云く、如來の音聲に八種の相あり、一に極好音、二に柔軟音、三に和調音、四に尊惠音、五に不如音、六に不誤音、七に深遠音、八に不竭音、○論註に云く、我成佛せしに妙聲遐かに布き、聞者に忍を悟ら令んこと是故に如來微妙の聲は、梵響十方に聞ゆとのたまふ、

この第十一の相好、梵音和雅等聞相と云は、如來樣の音聲の莊嚴である、佛の音聲を發したまふ、喉笛は內外貫徹て耀き、妍しきこと

瑠璃の筒に似たり、その狀ち蓮花を丸めたるが如し、出す所の音聲は、至極柔かにして、能く音律に叶ひ、十方世界に聞へざる所さらになし、凡て音聲には、五聲八音十二律などと、種々深ひ譯のあること、その調子がよく揃はぬと、聲はあり乍らその功がなひ、何ほど有難ひ法を說ても、聲が小ひと大勢の人に届かぬ、何ほど大きな聲を發しても、聲に艶がなひと有難ひ法も有難ふ聞へぬ、鳥雷や大砲の如きは、音が大き過る故、却て人が恐れて逃る、亦た何ほど妍しく大きにひびくといへども、音律と云て聲が鮮かに解さばけぬと物の道理が聞取難ひ、何も角も能く調子が揃て來ぬと、法を說ても話をしても更に功力はなひ、五聲八音十二律と、一切の音律を具へ所有調子を揃ひに揃へて在すが、佛け樣の御聲である、依て佛の音聲を、梵聲雷震の如く、或は梵聲悟深遠、又は梵響十方に聞ゆなど

御說なさりてある、梵聲こは梵天王、五種の音聲のこと、一には甚深にして雷の如し、此は聲が大きで、奧深こうに聞ゆる、二には清徹にして遠く聞へ、聞聲喜樂す、此は千萬里の遠方までも響き、鮮かに樣子を屆け、聞者大に喜び樂む、三には心に入て敬愛す、此は聲の貴さが、肝に銘じ腸に徹して、おのづと敬ひ愛するの情を起す、四には諦かに易く解了す、此は聞度々に意味がよく分りて、怪我にも聞落し、聞誤りの憂なし、五には聞者厭ことなし、此は聞ば聞ほど心が勇み立ち、何も驚すの初音を聞く心地を生ず、此が梵天王の五種の音聲なり、佛の音聲も亦た其如く、聲の大なことを雷のひゞくに喩へ、聲の爽かなことを天の鼓に喩へ、聲の妍しきを迦陵頻伽に喩へて御說なさりてある、この迦陵頻伽は、曠野と云山に住て居る鳥なり、聲の妍しきこと諸の鳥にまさる、迦陵頻伽は此地の

詞に直して、妙音鳥と云ふ、妙音鳥とは妙なる音の鳥と書てある、卵の黄水の時、妍しき聲を發して轉る、實に珍しき鳥なり、首は人間に少も異らぬ、生並ぶ鳥毛は、一々花の狀ちを作す、鼻筋通りて目も口も愛らしく、その面容十歳未滿の、娘の子を見が如く、兩手は翅さの下より生じ、爪長く指細く、足は鷄に似たり、胸より下の羽色は五色にして、鳳凰の羽の如し、その姿を見る者眼を喜ばしめ、その聲を聞者心を悅ばしむる、人間天人は申すに及ばず、菩薩聲聞の御方々でも、中々以てこの迦陵頻伽の如き、妍しき聲はゐ一御出しなさらぬ、其聲に勝る者は、十方世界に佛の音聲計り、故に發する所の言、綩均にして迦陵頻伽の、音の如しと御說なさりた、又た佛の音聲に八種の相あり、之を八音と云ふ、一には極妙音、此は淸淨心より、發したまふ御聲ゆへ、よほど美くひゞき渡て、聞者愛樂

の心を起す、二には柔軟音、此は大慈悲心より、發したまふ御聲ゆへ、至極柔かにして、有難く貴ふひゞく、由て聞者歡喜の心を起す三に和調音、此は高からず卑からず、大きすぎず小すぎず、能く調子が合て御詞の一々に、十分の理を乘せ至て聞取易ひ、四に尊惠音此は聲に佛の威光が具はりて殊勝にひゞくゆへ、聞者佛を敬ひ、法を重んずるの善心を生ず、五に不如音、此は聲の威勢つよく、いかなる勢ひ猛き、天魔外道といへども、一たび此の聲を聞ば直ちに、肝を潰し身を振はし恐れて逃る、六に不誤音、此は聲に佛心の智惠が具りておる故、露聊も詞に過ちがなひ、七に深遠音、此は聲のひゞき近きより遠きに及び、近きも喧すしからず、遠きも幽かならず八に不竭音、此は無量の功德力より發したまふ故、聲が枯るの痛むのと云憂がさらになひ、又た佛に三種の音聲ありと御說なさりてあ

る、一に遠近自在、此は遠ひと近ひと大ひと小ひと、音聲を自在に御出しなさる、二に十方遍滿、此は十方無量の世界、何所〳〵までも佛の音聲の、屆かざる所さらになし、三に三世不斷、此は過去未來現在の、三世にひゞき渡て、常住不斷に御說法なさりて在す、一念一刹那の間だも、聲に一寸も御休みがなひ、かやふに佛は三種の音聲を發して、十方三世に渡り、常に衆生を化益して在せども、悲哉吾等凡夫は、煩惱業障のために、耳の穴を潰され、之を聞ことができぬ、釋迦如來靈鷲山に在て、御說法の砌り、目連尊者が、佛の音聲を計り知んと、神通力を發して、直ちに須彌山の頂きに上りて聞たまふに、其聲御膝の元で、聞に少しも異らぬ、亦た通力を發して、大千界の畔り、大鐵圍山の頂きに上りて、聞にまた前の如く、釋迦如來は三明圓かに在す故、其事を御知り遊し、目連今吾十方遍滿の聲を、計り知んと欲す、善哉〳〵其志し、殊勝なりと仰せられて、直ちに佛の神通力を御貸なさりた、目連之を受け、つー〳〵〳〵西方へ向て行とも〳〵、とう〳〵九十恒河沙の佛土を過た、もはや神通盡て、ばつたり大地に落た、その所を光明幢世界と云ふ、佛を光明王如來と號す、佛身の高さ二十里、飯食の鉢の大さ一里、目連は一丈內外の、小ひ體だにして、鉢の緣に這上り途方にくれてあつちこつちと歩き回る、その國の聖衆、茲に袈裟衣を着し、坊主虫ありと箸を以て撮み上た、佛の言はく是々汝等、その沙門を輕むなよ、此より東方九十恒河沙の世界を過て、南閻浮提と云國がある其國に佛在す、釋迦牟尼世尊と號す、その佛の十大弟子の一人、神通第一の目連と云は、即ち其沙門のことなりと御告なさりた、又た光明王如來目連尊者に告たまふやうは、汝ちが體だ甚だ小きゆへ、

吾諸の弟子等、侮りて坊主虫と云ふ、小身の汝ちを侮る、憍慢心を亡すために、大神通を發して、之を吾諸の弟子等に見せ令て呉よと目連畏りましたこ、直ちに大神通を發し、つゝつと虚空に上ること百億由旬、空中に於て種々の、神變不思議を現し、而してきり〳〵回下り、佛身を遶ること七帀して、口に咒文を稱へて、世尊を讃歎し終る、その時諸の大衆、目連の大神通に感服し、異口同音に聲を擧げ、兩手合せて目連尊者を、恭敬禮拜致されたとある目連また聊か憍慢心の崩しあり、光明王如來目連に告たまはく、汝ち羅漢の大神通力を以て、佛の音聲を計り知んと欲するも、何ぞ其意を逐るを得ん、何こなれば佛は三祇百刧に、無量の福德を修し、十方遍滿の大音聲にて在す故、汝ち百千萬刧を經て、無量無邊の、三千大千世界を飛回るこいへ、ども、中々以て其限りを知ること相成ぬ、

能く思へ茲に來りしも、汝ちが一己の神通にあらず、全く釋迦牟尼世尊の佛力なり、汝ち今九十恒河沙の遠方なる、南閻浮提へ歸んと欲しても、歸ること能はざれは、些々たる羅漢の神通に誇て、佛境界の不思議解脫を輕しむ勿れと、嚴く御禁めなされた、目連回心懺悔こ誤り入り、遙かに東方に向て手を合せ、南無東方南浮の大法王願くは哀を垂て、吾失通の情を憐愍したまへ、南無本師の釋牟尼世尊、願くは佛の大神通力を以て、速かに吾を南浮の本國へ、歸ら令たまへやと、三拜九拜の禮を作して、大悲の哀愍を請れた、その時釋迦如來遙かに、目連の心念を知し召し、この閻浮提に在て、眉間の白毫相より、ぱーつと金色の光明を放ちたまふと、その光り九十恒河沙の世界を過て、目連所在の光明盤世界にかゞやき、直ちに化して金剛の臺となる、目連をその臺に乘せて、一念の間だに速かに

目連を靈鷲山の頂きに、御返しなされたと大論の中に御說なされてある、娑婆應化の、釋迦文佛の音聲ですら、目連の大神通を以て、其限りを究る事はできぬ、增て況んや本師彌陀の大音聲は、横に十方無量の世界にひゞき渡り、竪に過去未來現在の三世を貫ひて、等く聞へざる所更になし、

第十二に常光面各一尋相

○往生要集に云ふ、身の光り任運に三千界を照す、若し意を作すときは無量無邊なり、然るに諸の有情を、憐愍せんが爲の故に、光りを攝めて常に照すこと、面ごとに各一尋なり、○論註に云、觀無量壽經にのたまふ如きは、阿彌陀如來の身の高さ、六十萬億那由他恒河沙由旬、圓光は百億の三千大千世界の如しと、中略阿彌陀如來の舒臂に准じて言を爲が故に、一尋と稱するものは、圓光も亦た徑り

六十萬億那由他恒河沙由旬なるべし、是故に相好の光り一尋にして色像群生に超とのたまふ、○大經に云く、威神の光明は最尊第一にして、諸佛の光明の及ばざる所なり、或は佛光あり百佛世界を照す或は千佛世界、要を取て之を言ば、乃ち東方恒河の佛刹を照す、南西北方四惟上下も、亦復是の如し、○觀經觀音觀に云く、擧身の光りの中に、五道の衆生の一切の色相、みな中に於て現ず、○又勢至觀に云く、擧身の光明十方の國を照すに、紫金色なり、有緣の衆生皆見ことを得る、但この菩薩の一毛孔の、光明を見すら、卽ち十方の無量諸佛の、淨妙光明を見なり、

この第十二の相好、常光面各一尋相と云は、如來樣の御身より、常に放ちたまふ所の、光明の莊嚴である、その光明の種類、百千萬億無量無邊、その中圓光と云は、項より放ちたまふ正圓な光明のこ

と、次に身光と云は總身より、放ちたまふ光明のこと、次に光體とは光明を以て身體と作たまふ、御和讃に一々の花の中よりは、三十六百千億の、光明てらしてほがらかに、至らぬところさらになし、一々の花の中よりは、三十六百千億の、佛身もひかりもひとしくて相好金山の如くなりと御示しなさりてある、あの佛身も光りもひとしくてとあるが、即ち佛身のまゝか光明と云こと、次に常光とは御身に常に光明ありて、佛身の在す所に闇と云ことさらになし、次に現起とは、時に應じて別段の光明を放ちたまふこと、例せば釋迦如來が、法華經の會坐に於て、金色の光明を放せられ、東方一萬八千の土を照したまふた、亦た觀經の會坐に於て、同く光明を放て、光の中へ十方の淨土を現したまひた、此等が現起光と云もの、次に攝取とは、念佛の衆生を攝め取て、御護り下さるゝ所の光明なり、御

文章にその御身より八萬四千の、大きなる光明を放て、その光明の中にその人を、おさめいれておきたまふなりことあるこれなり、次に照熟とは、宿因甚厚の衆生に、その因緣を開かしむる所の光明、また御文草に、この光明の緣に催されて、宿善の機ありて他力信心と云ことをは、今すでに得たりことあるこれなり、餘は略す、光明は智惠の相と申して、佛の御胸に有ては一種の智惠、その智惠を表に現して、無量の衆生を、化益したまふが光明なり、觀經にかの佛の圓光は、百億の三千大千世界の如し、その光りの中に百萬億那由陀恒河沙の化佛在す、一々の化佛また、衆多の菩薩を引連たまふ、或は身の諸〳〵の毛孔より光明流れ出づ、その大さ須彌山の如し、或は八萬四千の相あり、一々の相に八萬四千の隨好あり、一々の故に八萬四千の光明あり、一々の光明十方世界を照して、念佛の衆生を攝取し

たまふ、等と御說なされてある、又た往生要集には、彼佛の白毫に八萬四千の好あり、一々の好に八萬四千の光りあり、その光り微妙にして、諸の寶珠の色を具ふ、惣じて之を云はゝ、七百五俱胝六百萬の光明なり、十方面に耀て、百千萬億の日月の如し、その光りの中に一切の佛身を現す、無數の菩薩相集て圍繞したまう、亦たかの一々の光明、普く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨たまはず、吾亦た彼攝取の中にあれども、煩惱に眼を障られて見こと能はず、然るに大悲倦ことなく、常に吾身を照したまふ、等と御示しなさりてある、又た大經には威神の光明は、最尊第一にして諸佛の光明の及ばざる所なり、或は佛光あり百佛世界を照す、或は佛光あり千佛世界を照す、或は東方恒沙の佛國を照す、南西北方四惟上下の佛國を照すも、亦復是の如し、等と御說なさりてある、また莊嚴經

には、一由旬を照すとあり、大論には十萬由旬を照すことあり、寶積經には百千尋を照すとあり、平等覺經には百千萬里を照すことある、又た大論には觀音勢至の光明は、十方恒沙の世界を照すことあり、觀經には觀音の圓光は、百千由旬を照し、勢至の圓光は、百二十五由旬を照すとある、平等覺經には觀音勢至の項じの光明、他方の千須彌山國を照すとある、かやうに佛の光明は隨意自在と、思ひの儘に御照しなさる、然るに自在の光明を、衆生の機緣に應じて、御身の長と齋く、縮めて手近く御照しなされて下さるゝを、一尋相と云、一尋はずーつと兩手を舒したまひた、其間だの廣さのこと、之を俗に一尋と云、御互ひの一尋は、體だが少ひで一尋が短ひ、八尺の人間なれば一尋も八尺、六尺の人間なれば一尋も六尺、五尺の人間なれば一尋も五尺、佛は或現大身滿虛空中、大きな衆生を濟度のため

には、虚空は一ばいの御姿たを現したまふ、その佛の一尋の光明は虚空あらん限り、或現小身丈六八尺、小ひ衆生を濟度のためには、丈六八尺の御姿た、或は一尺二尺、その時は一尋の光明も丈六八尺又は一尺二尺と縮めたまふ、觀無量壽經に說てある、眞身觀の佛けは御身の長が、六十萬億那由他恒河沙由旬、その佛の一尋の光明は六十萬億那由他恒河沙由旬の長さである、かやうに衆生の機緣に應じて、或時は姿たを伸し光明を伸し、或時は姿たを縮め光明を縮めて、自在に衆生濟度なさるが、常光一尋相の莊嚴である、觀世音菩薩は、擧身の光りの中に五道の衆生の、一切の色相を顯したまふ、擧身の光りとは、惣身より放ちたまふ光明のこと、五道の衆生の一切の色相とは、迷ひの世界の苦患の分野、天上界なれば五衰退沒の苦、人界なれば四苦八苦、修羅道なれば鬪諍嫉妬の苦、切つ切れつ

血鹽を流す、畜生道は殘害刹戮の苦、喰つ喰れつ呑つ呑れつ、一寸も油斷はできぬ、餓鬼道は斷食飢渴の苦、千萬年の歲月を經も、一粒の食を見ことあたはぬ、一滴の水を飲ことができぬ、八寒地獄は青蓮紅蓮の苦、寒氣に體だが裂て皮肉を卷、その體蓮の新葉の如く或は五體身分が裂て血鹽に染み、その體赤ひ蓮の花の如し、八熱地獄は切身燒肉の苦、切れたり突れたり煮れたり炙られたり、鐵丸喉を通されたり、觀世音菩薩は本師彌陀の慈悲を宰りたまふ、其で五道の衆生の苦患の相を、一々御身の光明の中へ現して、眼こに之を打眺め、耳に苦患の聲を聞き、宿命通を發しては、罪惡の因を取調べ、他心徹鑑の通力で、方便攝化の工夫を凝し、常に小首傾げて、濟度利生の御思案なさりて在す、當麻寺の觀音曼荼羅の、尊像を拜で覽なされ、項ドの光明の左り下に、地獄の相を現し、その次上に

畜生の相、その次上に天人の相、右脇の下に餓鬼の相を現し、その次上に修羅の相、その次上に人界の相、之か迷の世界を光明の中に現して、衆生濟度の御工夫なさりて在す尊像である、又た勢至菩薩は、本師彌陀の智惠を宰りたまふ、其で御身より大光明を放て、十方の國を照したまふこ、その威力に由てあまたの世界か、一面の紫摩金色となる、有縁の衆生その奇瑞を拜み奉るこ、各々智惠の念佛を授りて、廣大な利益を蒙る、亦たこの菩薩の毛孔より、放ちたまふ光明を拜み奉れば、十方一切の諸佛の光明が一度に拜れる、此は諸佛の智惠を一所に纏めて、持て在すが本師の彌陀、その本師彌陀の智惠を、宰りて在すが、勢至菩薩ゆへ、毛孔の光明を拜めば、一切の諸佛の光明が、一度に拜れるのである、

第十三に體質縱廣量等相

○往生要集に云く、體相の縱廣量等くして、圓匝圓滿せること、尼拘陀樹の如し、○大論に云く、身齊ふて中こ四邊こ、量齊を作す、○大經に云く、國中の人天形色不同にして、好醜あらば正覺を取らず、○又云く咸同一類にして、形ち異狀なし、但餘方に因順するか故に、天人の名あるのみ、○往生要集に云く、彼佛は三身一體の身なり、彼の一身に於て、所見同ドからず、或は丈六或は八尺或は廣大の身なり、所現の身は皆金色にして、利益する所各無量なり、一切諸佛こ其事同一なり、○大經に云く、阿彌陀佛の神通意の如し、十方の國に於て變現自在なり、或は大身を現して、虛空の中に滿ち或は小身を現して丈六八尺、現ずる所の形皆眞金色なり、

この第十三の相好、體質縱廣量等相こ云は、如來樣の體作の莊嚴のこと、凡て迷の衆生は四大假和合の體だ、毛髮爪齒皮肉、筋骨腦

隨垢等は、皆地大に歸す、唾洟膿血涎沫痰淚、津液精氣大小二便等は、皆水大に歸す、暖かにして食物を消化し、體だ朽ず崩ずなどは火大に歸す、動き靜り息の出入り、聲を發して言ふなどは風大に歸す、衆生の業感力に由て、この四大を合せ集て、假に體作りが調ふておる、其業に種々があるゆへ、受る所の身體にも樣々がある、竪に長過るもあれば短過るもある、横に廣過るもあれば狹過るもある恰好の善惡好ご醜ひとがある、極樂世界は平等の因果、國中の人天形色不同にして、身に好醜あれば正覺を取じご誓ひたまふ、形色は體作りのこと、之に好ひご醜しひとの差別が出來たら、正覺は取ぬと云こと、咸同一類にして形ち異狀なし、本師の如來も參た衆生も脊丈恰好に高ひ卑ひの區別なく、好ひご醜ひとの立分はなひ、但餘方世界に準ドて、假に菩薩聲聞人天の名前があるのみ、今縱廣量等

相ごあるは、佛身の竪横の數量、等くして恰好よく、御調ひ成りて在すこと、之を丈六の御姿で申さば、御身の長が一丈六尺なれば、兩手を伸し兩足を跨りたまひた、其幅も一丈六尺、之を團匝圓滿の相ご云、大論には之を中ご四邊ご、量齊しご御示しなさりた、この竪横の量等く顯したまふ恰好を、尼拘陀樹の如しと比例なさりた、尼拘陀は梵語、此に楊柳ご云、揚柳は垂柳ぎのこと、木の高が一丈あれは、枝を張も亦一丈、竪横の量齊く蔓りて、木の恰好至極好し佛身も亦是の如しと御喩へなされた、又此佛の御姿は三身一躰と云三身とは法身報身應身の三つ、初に法身ごは、色も在さず形も在さす、空々湛然の理、之を智德ご云、次に報身とは、慈念衆生の大悲より、五劫に思惟し永劫に修行して、莊嚴成就の極樂を西方に構へ相好金山の佛躰を、大寶蓮花の臺に乘せ、眼に無量の衆生を眺め、

耳に苦患の聲を聞き、心に攝化の工夫を凝し、大悲の音聲高々と、説法師子吼なされつゝ、往生成佛の人天を、御待なさりて下さる、御姿を、報身如來と云、次に應身とは、大悲西化を隱して、驚て火宅の門に入ると、苦患の衆生をみるに忍びぬ、本國の蓮臺を淳下、過去の七佛現在の釋迦、當來の彌勒菩薩の如く、八相示現して娑婆の此土に現れ、手を換意を換品を換、種々に善巧方便して、説法教化したまふ御姿を、應身佛と云、この八相示現を、現在の釋迦佛に依て御話し致さば、一に都卒天に在して、有緣の天人を御濟度なされ、化緣既に盡て、此閻浮の人界へ天下りたまふ、此を上天下天の相と云、二に相好鮮かに光明放て、六の牙ある白き象に乘せられ、摩耶夫人の右の腋下より、神ひを胎内に宿したまふ、此を托胎の相と云、三に母公御懷妊遊して十月を滿じ、無憂木の元に遊びたまふ

右の手を擧て、花の一枝を折となさる、腋の下パッチリ裂ると同時に、地より美しき蓮花を生ずる、其上に安然と御誕生遊し、大光明を放て天と地とを指差たまひ、四方に七足づゝ歩せられ、唯我獨尊の聲を擧たまふと、帝釋天は寶蓋を捧げ、梵天王は白拂を執て左右に侍り、難陀跋難の大龍王は、清淨の水を吐て御身を洒く、四天大王は天の繒を揃て、寶几の上に置く、龍神八部は空中に在て、音樂を奏し花を雨す、此を出胎の相と云、四に世の無常を觀じて、出家遁世の誓を稱たまふ、此時白毛の駒、忽然と現れて太子を乘す、四天大王恭しく、馬の蹄を四方に揭け、速かに檀特山に送り奉る、帝釋天は愼で剃刀を献上す、太子手自ら、髮を毀ち爪を剪て、直に法衣を着したまふ、此を出家の相とし、五に修行相調ふて、金剛寶石に端坐して、今や正覺を成んと、金剛喩定に入たまふ、所が第六天

の魔王、象馬車歩の軍を差向て、種々の責を作す、其時大光明を放て速かに、魔の官屬を降伏なされり、此を降魔の相と云、六に威光最も堆かく、三十二相を具足して、三明圓かに六神通を發し、自ら成等正覺を稱へたまふ、此を成道の相と云、七に身は獅子の高坐に上て、四辨八音の聲を發し、緣に隨ひ機に應じ、法を自在に說分て無量の衆生を御濟度なさる、此を轉法輪の相と云、八に化緣已に盡て、涅槃の雲に隱れたまふ、此を入寂の相と云、已上の八つは應身釋迦の、八相示現なり、斯樣に十方一切の如來、法報應の三身を具足して、或時は涅槃に入り、或時は生死に出て、入出自在三身一躰一躰にして分身自在なり、本師の如來は本國に在して、現在に說法したまふ、分身の如來は、十方世界に充滿て、種々に敎化を施したまふ、觀經に分身の無量壽佛、分身の觀世音大勢至、皆悉く極樂國

土に雲集して、空中を側塞すると御說なされてある、分身の佛けが極樂へ御歸りなされた時は、極樂の空中は、無量塵數の佛躰に塞がる、分身の佛は機緣に應じて、其の姿は千差萬別なり、或は大身を現ずて、虛空の中に滿たまふ、或は小身を現じて丈六八尺、亦は一尺二尺、善光寺の如來は、御長一尺五寸、右と左りに觀音勢至各一尺、此三尊は天竺の月蓋長者の願ひに由て、長者の娘め如是姫と云を濟度のために、西方淨土の本國より、身を分身を縮て態々、長者の宅に來せられた、其生身の御姿の儘を、龍宮の閻浮檀金を以て寫し取せられたが、善光寺の一光三尊の佛像なり、又東大寺の大佛は聖武天皇の御願にして、行基菩薩が、其勸進職を蒙りて之を建立せられた、御長十六丈八尺、間數に直して二十八間、顏の長さが七間幅が四間、肩の徑が十四間、胸の長さが十四間、手の腹が六間半、

足の腹が六間半、膝の周圍が百四間餘、蓮臺の徑が四十五間、然るに此東大寺の大佛は、治承四年源平合戰の時、平の重衡公か、兵火を放て燒てしまふた、其後後白河の法皇、大佛再建の義を、將軍頼朝公に命せられた、頼朝公重源上人を、勸進職に選で、資金を募集せしめ、再ひ御建立に相成たが、今の大佛なり、先の大佛の三ケの一の圖を取り、今の大佛は五丈三尺五寸なり、其他佛像の寸法は、千差萬別にして、其格の定はなひ、斯樣に泥木素像の佛體に、百千萬億の區別あるは、生身の本佛に、衆多の區別ある故ちや、御姿に區別をたてゝ、其機緣に相應せざれば、濟度利生の功はなひ、娑婆出現の、應身佛の上で云ど、釋迦如來は人壽百歲の時に現れて、其機緣に應ずたまふ、迦葉佛は二萬歲の時、俱那含佛は四萬歲の時、拘留孫佛は五萬歲の時、又當來の彌勒佛は、第十の滅劫八萬歲の時

又第十五の滅劫の時、九百九十四佛の御出世がある、第二十小劫の末に、樓至佛と云が現れたまふ、各皆時の衆生に應ずて、佛身の數量に區別がある、委きは此次十四の相好の所で御話し致す、又本國淨土の化佛菩薩も、十方世界に往つ戻つ過して、佛身の數量も相好も光明も、時々御換なさる、大經に一々の花の中より、三十六百千億の光を出す、一々の光より三十六百千億の佛を出す、と御說なさりてある、本國の淨土にも、十方無邊の世界にも、佛や菩薩は充滿てござまします、其衆多の佛體各皆、竪横の量等くして、其規則を亂し玉はず、脊恰好を充分に調へて、有緣の衆生に向ひたまふが、佛身の縱廣量等の相好功德なり、

第十四に身形脩廣端嚴相

○大般若經に云く、身相脩く廣くして端嚴なり、○大論に云く、大

身直身相とは、一切人中に於て、身最も大にして而も直し、觀經に云く、無量壽佛と身量無邊にして、凡夫心力の及ふ所にあらす、

○觀佛經に云く、毗婆尸佛は身の長六十由旬にして、圓光百二十由旬なり、尸棄佛は身の長四十由旬にして、圓光四十五由旬なり、通身の光り一百由旬なり、毗舍婆佛は身の長三十二由旬にして、圓光四十二由旬なり、通身の光り六十二由旬なり、拘留孫佛は身の長二十五由旬にして、圓光三十二由旬なり、通身の光り五十由旬なり、拘那含牟尼佛は身の長二十五由旬にして、圓光三十由旬なり、通身の光り四十由旬なり、迦葉佛は身の長十六由旬にして、圓光二十由旬なり、釋迦牟尼佛は身の長丈六、圓光七尺、七佛の身並に紫金色なり、○觀經に云く、無量壽佛の身高は、六十萬億那由他恒河沙由旬なり、眉間の白毫は右に旋て婉轉し、五須彌山の如し、佛眼は四大

海水の如し、身の諸の毛孔より、光明を演出す、須彌山の如し、彼佛の圓光は、百億の三千大千世界の如し、○又云く觀世音菩薩は、身長八十萬億那由他由旬なり、項に圓光あり面各百千由旬なり、天冠の中に一の立化佛あり、高さ二十五由旬なり、

この第十四の相好、身形脩高端嚴相と云は、如佛樣の御身の廣大端嚴なる莊嚴のこと、大論には大身直身相と御說なさりてある、大身は體の大きこと、直身は體の直きこと、端嚴は御姿より調ふて、妍しく圓かに在すこと、信は莊嚴より起ると申して、世間に於ても人品の好人は、自と他より貴で見る、況んや無量の衆生より、信仰を御取なさる、佛け樣ぢや、其で御身を廣大に、且つ妍しく圓かに顯したまふが、皆是衆生濟度の御方便なり、御亘人間の體は不淨揃不淨の分野を見度聞度、思ふ度々に嫌ふなりて、自こ厭離の心が起

る、厭離の心こは厭ひ離るゝ思のこと、佛の御身は之に反して、身内身外ともに莊嚴揃、其で莊嚴の摸樣を、聞度思度毎に、信仰の心が厚くなる、先づ凡夫の身體は、三十六物の不淨、大に分て三種となる、一に内含に十二の不淨あり、肝膽腸胃脾腎心肺、生藏熟藏赤痰白痰是なり、二に外相に十二の不淨あり、髮毛爪齒眵淚、涎唾垢汗大便小便是なり、三に身體に十二の不淨あり、皮膚血肉筋脉骨、髓肪膏腦膜是なり、この三十六物の不淨を以て、成立たが人間の體だ、此身の不淨を觀念して厭離せよと、往生要集に體の中の分野を經文に由て御示しなさりてある、先三百六十の骨、相集りて節々を拄へ、四の細き脉を以て之を縛り、五百分の完らを以て、其上を塗潰す、六脉をかけて五百の筋は、七百の細脉を纏ふ、其狀ち編の如し、十六の麁脉ありて帶り連る、二つの肉繩あり長さ三尋半、其繩

身肉に盤り、所々を絡結ぶ、十六の腸胃は、生熟藏を包み、二十五の氣脉は、骨こ肉との間を括る、或は九百の筋ありて、九百の臠をがゞり、三萬六千の血脉ありて、三升の血を總身に配る、或は身の皮九十九重に重なりて、九十九萬の毛孔を並べ、外の空氣を内に吸込み、内の汗や脂を外へ吹出す、腹に五藏六腑の備あり、色を白と青と赤こ黃こ黑との五種に分つ、其中大小の腸は各色を間て、十八曲に周轉ず、其狀ち蛇の路傍に蟠るが如し、斯の如きの身體、有漏の所成にして、頂きより趺らに至る、髓より膚に至る、一こして不淨に非るはなし、其故八萬戸の虫、この人身に集て、已が世界と作り、戸こは虫の住家なり、一戸の虫其數九萬、其形種々數多に分る四頭虫は頭が四つある、四口虫は口が四つある、九十九尾虫は尾が九十九本、其他千差萬別、秋毫よりも小し、中々人間の眼を以て見

ことはできぬ、尤も近來は見微鏡を發明せり、之を以て實檢すれば幾分か分る、釋迦佛の在世は、今を距こと三千年の昔し、未だ見微鏡の發明はなかりた、然れども天眼通を以て、八萬戸の虫を實檢なされ、委く其樣子を御經に說て置せられた、二戸の虫あり舐髮と名く、此は頭の髮毛の中に住て髮毛を喰ふ、其數十八萬、二戸の虫あり繞眼と名く、此は眼の中に住て眼を喰ふ、其數十八萬、四戸の虫あり食腦と名く、頭腦の中に住て腦を喰ふ、其數三十六萬、一戸の虫あり稻葉と名く、耳の中に住て耳を喰ふ、其數九萬、一戸の虫あり藏口と名く、鼻の中に住て鼻を喰ふ、其數九萬、一戸の虫あり遙擲と名く、唇の上部に住て、唇の上片を喰ふ、其數九萬、一戸の虫あり遍擲と名く、唇の下部に住て、唇の下片を喰ふ、其數九萬、一戸の虫あり針口と名く、舌の中に住て舌を喰ふ、其數九萬、或は四戸の虫腹の生藏を喰ふ、其數三十六萬、二戸の虫腹の熟藏を喰ふ、其數十八萬、四戸の虫尿道に住て小便を喰ふ、其數三十六萬、四戸の虫糞道に住て大便を喰ふ、其數三十六萬、或は五百戸の虫左邊に依る、左の腕肩腕下等を喰ふ、其數四千五百萬、或は五百戸の虫右の邊に依る、右の腕肩腕下等を喰ふ、其數四千五百萬、其他背にも尻にも膝にも足にも、何千萬何百萬の虫が居て、其場所を取喰ふ、都合虫の住家が八萬ヶ所、虫の數が七十二億有餘萬、凡て御互ひ凡夫の體は、有漏所成の肉身、それゆへ三十六物の不淨揃へ、臭物には蠅が群る、今は身內身外の不淨物へ、衆多の蛆が湧き、衆多の虫が住て、いやはや汚はしひとも不潔なども、云に云れぬ說に說れぬ之に引替佛けは、菩薩の智惠淸淨業より起て、三十二相の那羅閻身八十種好の美しき御虜にて在す、それゆへ身內身外ともに、淸淨揃

へ光明揃へ、花には蝶が群る、今は百千萬億無量無邊の、化佛菩薩が充滿たまひ、種々の神通を現じ、種々の妙法を演て、佛身の相好を莊嚴したまふ、此を身形端嚴の相と云、又大身直身相とは、佛體の廣大なること、觀經には身量無邊にして、凡夫心力の及ぶ所に非ずと御說なさりてある、實に佛身の廣大究ることは、千とも萬とも億とも兆とも、世間の數法を以ては、說れぬ云はれぬ議り知れぬ、爾れども無方やたらに、廣大なとか無邊とか云た斗りでは、空々寂々として分齊が立ぬ信用が取ぬ、其で凡そ衆生の機緣に應じて、廣大身を現じたまふ、釋迦佛出世の砌りは、時の衆生が七八尺の體だそれゆへ佛はその倍數を占て、一丈六尺の尊體を顯したまひた、其佛體に準じて、羅漢大比丘衆も、それ相應の體だ、難陀尊者と一丈五尺五寸、提婆達多は一丈五尺四寸、阿難尊者は一丈五尺三寸、其

他の大衆方皆、之に準ずた體てありた、過去の迦葉佛は、身の長十六由旬、拘那含佛ご拘留孫佛は、俱に二十五由旬、毗舍婆佛は三十二由旬、尸棄佛は四十由旬、毗婆尸佛は六十由旬、まだも大きな佛體を申さば、淨光莊嚴國の妙音大士と、身の長四萬二千由旬、淨花宿王智佛は、六百八十萬由旬、斯樣にそれ佛體に、種々の數量のあるは、皆是衆生の機緣に應じたまひたものである、信は莊嚴より起る、大な衆生へ小ひ體で向ひ、美しき衆生へ麁抹な姿たを見ては、却て佛を輕ずて法に信仰せぬ、目連が佛の音聲を計るとき、九十恒沙の世界を過た、もはや神通盡てばつたり落た、其所を光明幡世界と云、佛を光明王如來ご申し奉る、佛身の高さ二十里、飲食の鉢の深さか一里、目連その鉢の中へ落、途方にくれて鉢の緣に這上り、彼ち此ちする內、其國の佛弟子、箸を以て目連を挾み、茲に袈裟や

衣を着たる、坊主虫が居と云た、虫と輕しめられたるも無理はなひ二十里の佛體に付添佛弟子なれば、弟子衆の體も十八九里はありたに違ひなひ、その大身の弟子達の目から見れたら、一丈内外の體を作た目連と、全く小ひ虫と云外はなひ、内證は羅漢の悟を開て在す大權聖者の身なれども、體が小ひ斗り虫と見下られたかへひた、色界の四禪の無煩天は、天人の體が四萬里ある、無熱天は八萬里、善現天は十六萬里、善見天は三十二萬里、色究竟天は六十四萬里、斯る大身の天人の目から眺たら、二十里の佛體はおろか、何百里何千里の、體を顯したまひた佛けを見ても、これまた袈裟や衣を着した、坊主虫と見下るの外はなひ、其で一丈内外の衆生に向はせらるゝ時は、二丈三丈の佛體、百丈内外の衆生に對せらるゝ時分には、何百の何千丈、百里千里の體を持た衆生の爲には、何千里何萬里の佛體を

現したまふ、衆生の身體より、二倍三倍の大身を現して、相好光明鮮かに拜せたまふが、身形脩廣大身直身相と云、佛體の莊嚴である觀經眞身觀に說てある、觀念の向へ御立なさるゝ、阿彌陀樣の御身の長は、六十萬億那由他恒河沙由旬、觀音勢至の二菩薩は、恒河沙の數を除て、八十萬億那由他由旬、一由旬こ云が四十里なり、四十里の御姿でも廣大なもの、然るに六十萬億那由他恒河沙由旬と云は何ほど大なやう數法の學問せねば、其大さは分らぬ、何にもせよ大な如來樣ちや御項に圓光と云正圓な光明がある、其圓光をば一つと開たまふと、百億の三千大千世界の如し、眼は人界四洲の海を一ケ所に集て、一目に眺るが如く、この四洲の海を、立世阿毘曇論に依て、一寸御話致さば、先四洲の海とは、地邊山こ鐵圍山との間にある大洋海なり、地邊山は須彌を周る、七金山の第七番目の山なり、

鐵周山は四洲の海の外側を圍ふ、九山八海の終の山なり、地邊山より鐵圍山に至る、その海の幅は三億二萬二千由旬ある、鐵圍山の水際をぐるつと回ると、その里程三十六億八千四百七十五由旬なり、其中に人界の四洲がありて、一洲毎に二の中洲と五百の小洲と、六萬の衆山と云がある、之を集ると中洲が八つ、小洲が二千衆山が二十四萬、その四つの大洲と此に付屬する中洲と、小洲と衆山とを除くの外は一面の大海なり、之を人界四洲の海と云、其海を一ヶ所に集て、一目に眺るが如く、佛の御眼は漫々と廣博に拜れたまふ、眉の間だに白毫と云白ひ毛がある、此をずつと伸したまへば、六十萬億の御身の長と等し、縮たまへは五須彌の如し、八万由旬正四角の須彌山を、五並べた如くである、五の須彌は四十万由旬、里數に直すと一千六百萬里なり、御身の毛孔より、光明が流れ出る、その光

また須彌山の如し、觀世音菩薩の圓光は、面の廣さ百千由旬、冠りの中に一の化佛が立て在す、身の長二十五由旬なり、里數に直すと一千里、斯る廣大なる佛體が、觀念の行力に由て了々と拜るゝぞよと、觀無量壽經に御說なさりてある、併し佛說の大な話を聞付ぬ人々は、必ず疑を生して、信用致し難ひであろふ、一往は尤なこと何となれは、着物の縫目や、髮毛の間に屈んでおる蚤や虱に、牛馬の話は不向である、亦三尺四方を世界としておる、井の内の蛙に向つて、何千萬里の大海を游回る、鯨か鰐の語たりは餘り大過て、必ず疑を起すに違なひ、併し畜生の虫は敢て論ずるに足ず、人は萬物の長と呼るゝ、貴重の動物、全能の知識あるゆへ、現量を以て比量すると、目の前の事に引比て、物の分齊に百千萬億の、段取のあることを合點せねばならぬ、然時は大なことも小ひことも、案に虛僞り

と貶むべきものに非ず、先人間千分の一にも足ぬ、小ひ蚤虱がおるとすれは、蚤虱の千分一萬分一の、小ひ虫もおると云理が出て來る加之ならず方今は五百倍一千倍の見微鏡がある、これを以て調たら屹度實見ができる、亦人間より百倍二百倍の大身を占た、鯨や鰐がおるとすれば、其鯨や鰐に百千萬倍勝た、大身の衆生もおると云理がたは、之が現量を以て比量すると云、議論の法律なり、菩薩處胎經に說てある、大身の金翅鳥は、兩方の羽をずーつと伸すと、其間が三百二十萬里あると云、阿含經に說てある、難陀跋難陀の大龍王は八萬由旬正四角の須彌山を七重に卷て、頭は須彌の頂上にあり、尾は大海の底にありと云、四分律に說れし、摩竭大魚は、頭から尾に至る其長さは、二萬八千里ありと云、斯る大な話は單に、佛經にのみ說れしに非ず、世間の書物にも、隨分大な話が載てある、莊周の

說に大鵬と云鳥は、一寸と身を海に付ると、三千里の大海が一度に動て、大波を起すと云、亦地を離て非行自在、遙かに九萬里の天に遊ぶと云、或說に巨靈の龜は、蓬蓬山を枕にして、身は大海の底にありと云、迷の衆生の業感でさへ、斯る大身を現すもの、況や佛は十方世界の御大將、身量無邊にして、凡夫心力の及ぶ所に非ず、六十萬億那由他恒河沙由旬の佛體は、觀念の行力に對せられ、本體を縮て假に現したまひた御姿である、假の御姿でさへ廣大無邊なもの斯る大身を以て、無量の衆生の頭に立たまふが、佛の身形脩廣の相好功德なり、

第十五に容儀洪滿端直相

○大般若經に云く、容儀洪滿にして端直なり、○大經に云く、顏貌端正なること、世に超て希有なり、容色微妙にして、天にあらず人

にあらず、皆自然虚無の身、無極の體を受く、○平等覺經に云く、亦た世間人の身體にあらず、天上の身體にあらず、○義寂の云く、胎藏の生育する所に非ざるが故に自然と云、飲食の長養する所に非ざるが故に虚無と云、老死の殞沒する所に非ざるが故に無極と云、○大經に云く、佛阿難に告たまはく、世間に貧窮乞人の、帝王の邊に在んが如きは、形貌客狀寧ろ類すべけんや乎や、阿難佛に白さく假ひ此人をして帝王の邊に在ら令るに、羸陋醜惡にして、以て喩ごするなきこと、百千萬億不可計倍、中略佛阿難に告たまはく、汝が言ば是也、假ひ帝王は人中の尊貴にして、形色端正なりこ雖ども、之を轉輪聖王に比するに、甚だ鄙陋なりこす、猶しかの乞人の、帝王の邊に在んが如し、轉輪聖王の威相は殊妙にして、天下に第一なれども、之を忉利天王に比すれば、又復醜惡にして、相喩ることを

得ざること萬億倍なり假令天帝を、第六天王に比するに、百千億倍にして相類せざるなり設ひ第六天王を、無量壽佛國の、菩薩聲聞に比するに、光顏容色相及逮ざること、百千萬億不可計倍なり、

この第十五の相好、容儀洪滿端直相と云は、如來樣の容貌の莊嚴なり、容貌こは姿た形ちの粧ひのこと、佛は萬德圓滿の尊容にて在すゆへ、粧ひの殊勝なること、威光の堆かきこと、人中天上に比ひなし、故に天に非ず人に非ずと御說なされた、立ば芍藥坐れば牡丹歩く姿たが百合の花、と云歌の文句は、藝妓女郎の、姿たの愛らしきを評したもの、漢の李夫人や唐の楊貴妃は、絶世獨立の大美人、姿たは春の嵐に靡く、青柳の如く、顏貌は秋の夜を照す、月の妍しきに優る、翠りの眉弓の狀ちを作し、眼のすゞやかなるは琥珀の珠微笑を含めば丹花の唇る、露に潤ふ芙蓉の顏せ、旭に耀く雪の肌、

李夫人は漢の武帝に事へ、楊貴妃は唐の玄宗帝の愛女で有た、吾日本の美人は小野小町、子供に至るまで其名を知ぬものはなひ、斯る傾城の大美人も、五蘊所成の肉身なれば、遷流無常にして、花の姿たの美しきも、永く持てはおれぬ、李夫人の死だ時に、漢の武帝は深く名殘を惜せられ、返魂樹を以て、製したる香を焚ば、死だ者も生戻ると云が仙人の法術、淨瑠璃の文句に、魂ひ返す返魂香と云是なり、武帝わざ〳〵此返魂香を求めさせられ、李夫人一たび返れかしと、一心にこの香を焚て祈られしが、不思議なるかな仙術の奇妙一寸烟りの中に面彰を現したが、間もなう烟りと共に消失せた、亦た楊貴妃は玄宗帝に事へ、寵愛淺からず、驪山の花清宮と云、玉の御殿に於て、帝王と錦の褥を齊ふし、霓裳羽衣の曲と云を奏せて、耳を慰め眼を娯み、實に榮耀榮花の日暮しを致された、斯る果報目

出度大美人も、玄宗帝安祿山の難に逢れた時、哀れなるかな楊貴妃は、馬嵬の樹の下にて、縊り死に殺された、亦た小野小町は、面影のかはらで年の積れかし、設ひ命にかぎりありとも、と云歌を咏て命に限りのあるのは是非に及ばぬが、桃や李のこの色艶は、どうぞ此儘で居度と、日暮念ド祈りて居たが、遷流無常は世の分野、ついに老耄の白髮婆となりて身を果た、雪の肌を錦で包み、綠りの髮を珠玉で飾り、桃や李の粧ひ作して、國を傾け城を崩すほどの大美人も、無常の風に誘れたら、玉を欺く二つの眼乍ち閉ぢ、出入りの息は永く絶へ、丹花の唇は澁色に轉ぢ、紅顏空く變ド色青ざめ、桃李の粧ひも消失せて、雨に模れし花と同樣、雪の肌も一天の烟り、柳の腰の愛らしきも、唯一掬みの白骨のみ、哀れと云も中々愚かなり、天上界は十善業の所感、人間中の大美人も、中々天人には及ば

ぬ、頭に飾る天冠瓔珞、身に絡自然の羽衣も、手には無量の樂器を捧げ、足に五色の雲を踏み、宮殿樓閣に端坐して、目には花の美きを眺め、耳に五妙の音樂を聞き、鼻に紛々の香ひを嗅ぎ、舌に甘露の味ひを嘗め、身に清涼の風を受け、容貌尤も妍く、美を究め妙を盡して、天道の五欲を樂でおれど、迷界の悲さには、これまた老死殞沒の體たにして、臨終に至らば五衰の相を現ず、一には花鬘忽萎の相、頭に飾る花の鬘が忽ち萎み、七寶の瓔珞が千切て捨る、二には天衣塵垢の相、白鶴孔雀の羽色に優る、自然の天衣も、古びて痛んで垢付て、千切れ捨て丸の裸かになる、鳥の毛を毟たも同樣、三に腋下汗出の相、異香紛々の芳りは自然に失て、腋の下より惡臭き汗を流し、漸々に五體自分を汚す、四に兩目數瞤の相、天眼遠見の通力を失ふて、眼が霞み曇み、膿が流れ血が流れ、爛れ腐て盲目となる、五には不樂本居の相、七寶の宮殿五色の雲、五妙の音樂甘露の食等、一切樂みの具に離れて、身心の快樂を失ふ、是相を現ずる時、天女眷屬皆悉く遠離す、林間に捨られ悲み泣て云く、諸の天女をば吾常に憐愍しつ、云何が一旦に吾を捨ること草の如くなるや、吾今怙み依かたなし、誰かよく吾を救はん、願くは慈愍を垂て、吾壽命を延したまへと、倒つ轉つ泣て叫んで哀を請こも、老死殞沒の不淨の身體、是非に及ばず、容貌の美も一夜の夢、凡て迷の世界は皆此通り、人間天人といへども、五戒十善の福德が盡たら哀れなもの之に引替佛は無量億劫に、六度數萬の大行を修して、証りを開せられた萬德圓滿尊容、顏貌端正にして、超世希有なり、天に非ず人に非ず、自然虛無の身無極の體、吾等凡夫とは事が違う、無極最上の尊體にて在すゆへ、陰陽和合の養を受たまはず、此が佛身の自然

と云もの、飲食衣服の育に關らず、此が佛身の虛無と云もの、無常の風に誘はるゝの恐れもなく、此が佛身の無極と云もの、一たび金剛無漏の佛體を得れば、永く生死輪回のきづなを絶ち、無量永劫遷らず變らず、面輪端正に在して、秋の月東の峰に懸りし如く、白毫白く耀て、高山の雪旭の光りに映ふが如し、翠りの眉は天帝の弓の形ちを作し、鼻筋修く高く、鸚鵡の直き嘴に優る、青蓮の眸り鮮かにして、慈悲の德を顯し、丹花の唇る妍くして、愛愍の色を施す、迦陵頻伽の聲、師子相の臆、仙鹿王の膊、千輻輪の趺に至るまで、一こして莊嚴光明にあらざるはなし、實に佛の容貌の殊勝さ、威光の堆かきは、中々以て果報拙き人間天人の、筆や詞を以て盡すべきにあらず、其で大無量壽經に比例を取て、佛の相好功德の廣大なることを御說なさりてある、佛の言はく是阿難よ、世間に於て非人乞

食と、一國の大王と比べたら、姿たの振合形ちの粧ひ、何ほどの段取があるかこの御尋ね、阿難尊者の御答に、されば何ほどの段取と仰せられましても、夫はどうも云やうも述やうもございませぬ、非人乞食は人間中の下りづめ、一國の大王は人間中の上りづめ、下り結の賤ひ者こ、上り結の貴ひ御方と、假にその段取て申さず、百千萬億無量無邊の、相違ありこ云の外はございませぬ、是阿難よ乞食は大王と、百千萬億の相違ありこ云、それほど貴ひ一國の大王も、之を人壽八萬歲の時に出現したまふ、轉輪聖王に比べたら、また前の如く分齊によほどの相違がある、それほど貴ひ轉輪聖王も、之を欲界第二の天上界、即ち忉利天の大王に比べたら、いかいや醜ひとも拙ひこも、中々以て傍へも寄付れることではなひ、それほど貴ひ美ひ忉利天の大王も、之を欲界第六他化自在天の大王に比べたら、

また前の如く分齊に、百千萬億の相違がある、是阿難よ前の如くに比例を取て思て見よ、國王よりは轉輪聖王、それよりは忉利天王、それよりは第六天王と、段々と上れば上るほど、上には上がありて福德が勝れ、果報が優りて、威光いよ〳〵堆く、粧ひます〳〵美く斯る貴き第六天王も、之を極樂世界の本師の如來や、菩薩聖衆の相好光明に比べたら、いかはや醜ひこも拙ひとも、違うこも隔つとも百千萬億不可計倍、どうともかうとも言やうも述やうもなひ、かやうに心も詞も絶果た美き妍しき、相好光明を具足して在すが、容貌端正の莊嚴功德なり、

第十六に七處充滿愛樂相

○大般若經に云く、兩の足二の手掌の中、項じ及び雙る肩、七處充滿したまへり、○大論に云く、七處みな平滿端正にして、色淨よく

餘身に勝る、○又云く七處皆卍字の相ありて分明なり、○觀經に云く、彼の佛の圓光は百億の三千大千世界の如し、圓光の中に於て、百萬億那由他恒河沙の化佛あり、一々の化佛また、衆多無數の化菩薩あり以て侍者こす、○往生要集に云く頸より圓光を出す、咽喉の上に點相ありて分明なり、一々の點の中より一々の光りを出す、その一々の光り前の圓光を遶ること、七帀を滿足して衆畫分明なり、一々の畫の間だに妙なる蓮華あり、花の上に七佛まします、一々の化佛に各七菩薩あり以て侍者こす、一々の菩薩手に如意珠を執り、その珠に金光あり、青黃赤白及び摩尼の色、皆悉く具足す、諸の光りを圍遶して、上下左右各々一尋、佛の頸を遶て了々畫の如し、

この第十六の相好、七處充滿愛樂相と云は、如來樣の七處に、柔輭愛樂の相を具へて在す莊嚴のこと、七處とは項ゞと左右の肩と、

兩手と兩足とこの七ケ所を云、この七つ大からず小からず、長すきず短すきず、平滿端正と恰好よく調ふて、人天菩薩の及ぶ所にあらず卍字の相ありて分明なり、卍字は吉祥の相と申して、一切の福德殘さず餘さず、此の七ケ所に集持て、分明と現したまひてましますが卍字吉祥の相と云もの、その相尤も愛樂すべきなり、愛樂は俗に愛らしひと云、或は優ひと云、子供の時分は誰も彼も皆、脊丈恰好顏貌まで、殊の外愛らしひ優ひ、それは其筈幼ひ時は心に惡機がなひ貪欲も少く、瞋恚も薄ひ、其で心の儘が表に現れて、自づと姿た形ちが愛らしひ、追々成長するに隨つて、貪欲が深くなり、瞋恚が强くなり、人を欺くやら僞るやら、謗るやら憎やら、喧嘩口論公事訴訟、吾身勝手の欲情を募る、その惡心が表に溢れ出て、姿た狀ちに邪見の相を現すゆへ、自づと憎らしひ否らしひ、畜生でも其通り、

鳥で申さば鷲や鷹や鳶の如きは、機性が荒ひ、それに應ずて姿たが憎らしひ、鶯や燕めは柔かな鳥、それに應ずて姿たが愛らしひ、獸で申さば獅子虎狼の類は、至て恐しき機性を具へた動物、それに應ずて表に邪見の相を現ずておる、象や豚の如きはよほど大きな體だではあれど、機分が柔な故、それに應ずて姿たが愛らしひ、一切衆生皆心の相が、自づと姿たに現れておる、增て況んや佛は大慈大悲の御心にて在すゆへ、惡人可愛女人不便の、慈悲柔輭の相が表に現れ、顏貌は申すに及ばず、左右の肩も項ずも、諸手諸足に至るまで愛らしく柔和に拜したまふ、此が七處愛樂の相と云もの、さて兩手兩肩兩足の莊嚴は、別にその相を御說なさりてあるゆへ、今は項の一相に付て御話しを致す、先づ觀無量壽經に、彼佛の圓光は百億の三千大千世界の如しとある、圓光は項より放ちたまふ正圓な光明の

こと、三千大千世界とは、人界四州と日月と、須彌七金山と、欲界六天と梵天と、之を各千集めたが、一の小千世界、それを千集めたが中千世界、それを千集めたが三千大千世界、一の三千大千世界でさへ中々廣大なもの、爾るに阿彌陀如來の項より放ちたまふ圓光は百億の三千大千世界の如しとあれば、心も詞ばも絶果てゝ、凡夫心力の及ぶ所に非ず、尤も此は開て放ちたまふ時の數量、縮めて放ちたまふ時は、一尋相と云て御身の丈と齊し、この圓光の中に百萬億那由他恒河沙の化佛が在す、一々の化佛また無數の化菩薩を引連たまふ、觀音の圓光の中には五百の化佛在して、その化佛また五百の化菩薩を引連たまふ、往生要集に頸より圓光を出す、咽喉の上に點相ありと說り、咽喉は喉笛のこと、その喉笛の上にポツチ〳〵の點が、あまた現れておるを點相と云、一々の點より光明が耀ぐ、その光り前の圓光を七返繞て、ばらつと亂れ散けると、その光の中に諸の畫が顯はるゝ、一々の畫の間だに妙なる蓮華が生出る、蓮華の上に七體の化佛が在す、その化佛また七體の菩薩を引連たまふ、その菩薩百福莊嚴の手を伸て、如意寶珠を取り、之を空中に投たまふ、如意は思ふ儘の樂具を顯すと云こゝろ、之を梵語に摩尼と云ふ、遠公法師の書に、摩尼耀りを吐ば、衆珍自ら積るとあり、此は摩尼の光りの德に由て、諸の珍しき寶が、目前に充々積ると云こと、この寶珠は金翅鳥の膽より出づとあり、或は大龍王の腦より出とあり、又は佛舍利が變ずて摩尼となる、この珠を青き絹に裹で水につけると、水も珠も一切青く見ゆる、黃赤白紫き縹き等何色にかきらす、裹みし物柄の色に由て、珠の色が自在に變ず、水の色が自在に轉ずる月光摩尼日光摩尼、金剛摩尼水精摩尼眞珠摩尼等と、この寶珠の

種類あまたに分れておる、斯る貴き摩尼寶珠を、諸の化菩薩が兩手に捧げ、一々空中に投たまふと、佛身の光明を遶て、或は上り或は下り、前後左右に飛散けて、その玉の光り各一尋、六尺を尋と云、或は八尺或は一丈、大體一尋は一ひろと云こと、兩手を伸してその幅六尺あれば、六尺を一尋と云ふ、八尺あれは八尺を一尋と云ふ、一千由旬の佛體なれば、一ひろもまた一千由旬、この寶珠一尋の光り、上りつ下りつ前後左右に散けて、或は佛の頂を照し、或は兩手兩肩兩足を照して、種々の美き畫を現したまう等の所作が、皆是七處愛樂の莊嚴相なり、

第十七に肩項圓滿殊妙相

○往生要集に云く、肩の項だ圓滿にして殊妙なり、○大論に云く、肩圓好相は一切の治肩に是の如きの者なし、○觀佛經に云く、頸相より二の光を出す、その光り萬色なり、遍く十方一切の世界を照す諸の衆生ありて善根熟する者、此光明に遇へは、十二因緣を悟を辟支佛と成る、この光り諸の辟支佛の頸を照す、この相を現すこと、行者遍く十方一切の辟支佛を見に、鉢を虛空に擲て十八變を作す、諸の辟支佛の、一々の足の下に皆文字あり、中略一字に一光あり、一光に十二の音あり、一音は苦空無常無我を說き、一音は十二因緣を演ぶ、○往生要集に云く、缺瓮骨滿の相あり、光り十方を照して琥珀の色を作す、この光りに遇ふ者、聲聞の意を發す、是の諸の聲聞、この光明を見に、光り分て十支となる、一支に千色あり、十千の光明となる、光りの中に化佛まします、一々の化佛に四比丘あり以て侍者とす、一々の比丘皆苦空無常無我を說り、

この第十七の相好、肩項圓滿殊妙相と云は、如來樣の兩肩の項だ

及び缺盆骨の莊嚴のこと、觀念法門には兩肩の滿相とあり、大論には肩圓好相とある、右左りの肩の項だ、凸からず凹からず、平らにして恰好よく調ひ、その殊勝さ貴さは、人天菩薩の及ぶ所にあらず頸下肩の間だより、二種の光明を放ちたまふ、その光り萬色なり、この萬は百千萬億の數法の萬に非ず、大經にその花の光明に、無量種の色ありと說り、今肩の項より放ちたまう二種の光りも、無量百千種に、色艶を異て耀きたまふことを、萬色と御說なさりた、光明の色艶を、無量無邊不可思議にかえて放ちたまふが、この肩項殊妙の相好功德なり、色は眼根の境と申して、眼を慰めるは必ず色艶にある、その色の種類は中々以て、二十や三十の小數ではなひ、衆寶色は諸の寶の色、草木色は所有の草木の色、器具色は凡ての器械及び衣服の色、動物色と凡て生物、鳥なれば羽色獸なれば毛色、所有

色の名稱は千差萬別、赤黃青紺白縹紫綠、此等は即色と云て、直に名を施したもの、朱色丹色紅色、火色水色桃色、茶色土色灰色、煤色墨色鼠色、藍色柳色松葉色、芭蕉色菜種色栗色澁色、此等はその物柄に依て名を施したもの、之を依物色と云ふ、黑多くして赤の少きを殷と云、赤多くして黑の少きを綵と云、黑と黃と相交るを黧と云、黑と青と相交るを純と云、青と黑と相交るを蒼と云、此等は色と色とを間へ合せて名を施したもの、之を間色と云、水の黑きを以て火の赤きを尅す、黑と赤とを合せたを紫と云、土の黃なるを以て水の黑きを尅す、黃と黑とを合せたを黃駹と云、火の赤きを以て金の白きを尅す、赤と白とを合せたを紅と云、金の白きを以て木の青きを尅す、白と青とを合せたを碧と云、木の青きを以て土の黃なるを尅す、青と黃とを合せたを綠と云、こ

れまた色と色とを間へ合せた間色なり、次に衆寶色とは、七寶百寶無量百千の寶に、一として美き色を具へざるはなし、寶と云はゝ世人の口僻に、金銀七寶と云、由て佛も淨土の莊嚴、御姿たの相好を御說なさるゝに、大概この七寶を用ひたまう、故に今七寶の御話しを致す、餘の寶を申さば、二席か三席にては盡し難し、先七寶とは黃金白銀、瑠璃玻瓈硨磲、赤珠碼碯の七を云、一に黃金とは所謂金のこと、大論に山の石砂赤銅の中より出こあり、此れが寶の中では第一等を占む、久く土に埋め、永く水に入置ても垢を生ぜず、幾度火に燒て鑠しても、色を變ぬは金の德、二に白銀とはいはゆる銀のこと、梵語に阿路巴と云、大論には燒石の中より出とあり、或書には金の白き、極美なるを銀と云こあり、三に瑠璃此は梵語なり、茲に不遠こ翻す、吠瑠璃毗瑠璃毗頭黎なごの名あり、物に當りて破れ

ず、火に燒て鑠けず、この瑠璃に十種の品を分つ、赤白黃黑青、綠縹紺紅紫の十色、四に玻瓈これも梵語、茲に水玉と翻す、瑩き映ふこと水の如し、堅きこと玉の如し、故に水玉と云、大論に千歲の冰り化して玻瓈こなるこあり、この玻瓈は水精こ其質を同す、水精には黑こ白との二種がある、玻瓈は其種類五色に分る、その中紅色の玻瓈を以て最上こす、五に硨磲は梵に牟婆洛揭拉婆と云、茲に青白色寶と翻す、世に用ひ來りし硨磲は、甲類なり名を海扇こ云、和訓に多羅加伊と云、その形ち扇の如し、故に海扇と名く、七寶の中の硨磲は、斯る麁抹な品にあらず、白玉と云ひ玉石こ云ふ、白き玉の石なり、西國に生ずる一の寶石なり、その狀ち蚌蛤の如し、表に美き文理あり、六に赤珠こは審さに赤眞珠こ云、赤蟲こいへる虫の體だの中にある珠、その色尤も赤し、大蚌の中にも此眞珠あり、正

白にして耀りある分を上とす、聊か青色を帯たるものを中とす、白に聊か粉のある分と、油黄の色を作たる分とを下とす、色正赤にして艶を具へたる分を上々等とす、外に眞珠にあまたある、龍の頷にあるを龍の眞珠と云、大蛇の口にあるを蛇眞珠と云、魚の眼にあるを魚眞珠と云、鮫の皮にあるを鮫眞珠と云、鼈の足にあるを鼈眞珠と云、蛛の腹にあるを珠眞珠と云、然れども此等は前の赤蟲、及大蛛の體の中にある、眞珠よりはよほど劣る、七に瑪瑙梵に摩羅伽隷と云、色は馬の瑙によく似ておる、北地の南番西番など云へる國の名産なり、石にあらず玉にあらず、よほど堅くして利き刀を用ゆれども、容易に刮ることはできぬ、中に人物或は鳥や獸の、形ちを作たる諸採がある、この瑪瑙の種類またあまたに分る、截子瑪瑙と云がある、此は黑と白との二色相交る、合子瑪瑙と云がある、此は黑

きこと漆に勝る、線を引たる如き正白の筋あり、錦紅瑪瑙此はその色錦の如く、纏子瑪瑙此は紅と白との糸筋幾等も現れておる、此の四つは上等の品、淡水瑪瑙と云がある、此は理めに淡水の花の狀ちを顯す、醬班瑪瑙と云がある、此は理めに紫紅の花の狀ちを顯す、曲嘗瑪瑙と云がある、此は理めに粉紅の花の狀ちを顯す、此三は下等の品、已上の七を七寶と云、此中玻璃赤珠の二つを除ひて、珊瑚琥珀の二つを加へて、七寶と御説なさりた所もある、珊瑚とは大論に海中の石より生ずる樹なりとある、大秦國の西南に、珊瑚洲と云島がある、その近方の海の底に、あまたの大磐石がある、その岩の上に珊瑚樹が生る、鐵の網を沈めて、其木を拔取る、木の狀ち玉に似たり、色赤く枝の大なるものは高さ六七尺、小さなるものは一二尺、新木は黄色、漸々成長して赤くなり、美き艶を増と云、次に琥

琥珀は二種あり、白と紅となり、先白の琥珀は虎の魄と書て虎魄とよませる、この虎魄は白き石に似て、大さ雁の卵の如し、虎は夜物を見に、一方の目より光りを放て、一方の目を以て見る、獵師が矢を放てその虎を射殺すこ、目の光りが地に落る、日を經てその地を一尺斗り堀と、雁の卵の如き立皮な玉があると、芽亭客話こ云書物に出てある、其て此の玉を、虎の魄こ書て虎魄こよませる、次に紅琥珀は松の脂が地に落て、千年を經こ茯苓こなる、その茯苓が亦た千年を經と今の琥珀こなる、地より八九尺の底にあるこ云ふ、この玉のある所には草木が生ぬ、紅の色を作て光りあり、この玉を布を以てふきたてゝ塵を吸ものは、眞の琥珀なりと云、因に云水精に二あり、南水精は白く水に入るゝこ、水と同色になりて玉の狀ち見へず之を上こす、北水精はその色黑し、その他百千萬億の貴き寶があ

りて、各々美しき色を具へて光り耀く、一切の事物に好か惡か色の具らぬものはなひ、その寶の色も草木の色も、動物の色も器械衣服等の色まで、その中美しきを撰び集めて、一々光明に顯し、十方一切の世界を照したまふが、肩の頃だの萬色の光明である、善根力の厚き衆生、この光明の御照しに由て辟支佛となる、辟支佛は緣覺の證り、この光り辟支佛の頸を照したまふこ、十方一切の辟支佛か、雲の如く霞の如く目前に現れ集て、各々鉢を虛空に投げ、十八種の神通を現したまふ、その辟支佛の足の下に、種々の文字を顯す、文字の一々より、各々一の光明を放つ、一々の光明より十二種の音聲を出す、その聲苦空無常無我等の、有難ひ所の法を說演たまふとある、次に缺盆骨とは、兩肩の凹みたる所、即ち首の兩脇の下、肩の凹み骨のこと、佛の缺盆骨は正白にして、琥珀の光りを放ち、普く

十方一切の世界を照したまふ、有縁の衆生この光りに遇へば、聲聞の證りを開く、その聲聞の光明十支となる、一々の支に千の色を具へて、十千の光明を放つ、光の中に諸の化佛在す、一々の化佛四方に比丘僧を引連て、又た無常無我の法を說しめたまふ、

第十八に髆腋悉皆充實相

○往生要集に云く、腋下悉く皆充實にして、紅と紫との光を放ち、諸の佛事を作し、衆生を利益す、○無上依經に云く、衆生中に於て利益の事を爲し、四正勤を修め、心に畏る、所なきが故に、兩つの肩平に整ふて、腋下の滿相を得たり、○觀佛經に云く、腋下に摩尼の珠あり、皆光明を放つ、その光り紅と紫となり、中に金の花あり、花開敷化して、無量百千の衆花となる、一々の花の上に無量の佛在し、是諸の化佛に各千の光りあり、光りに一の化佛在す、その光り五色なり、

この第十八の相好、髆腋悉皆充實相と云は、如來樣の髆腋の莊嚴のこと、髆は肩の骨、腋はわきの下、悉皆充實とは、肩の骨わきの下、大丈夫に御調ひなさりて在すこと、この二ケ所より紅と紫との二種の光明を放せられ、諸の佛事を行ひたまふ、佛事とは佛の大悲の事業、その事業種々ある中、第一が降魔の事業、此は諸の惡魔を降伏したまふこと、凡て一切の善法を、妨るものを魔と云、大論に煩惱魔、五蘊魔、死魔、天魔の、四種を御說なさりてある、之を亡さねば衆生濟度の、大事業は調はぬ、其て佛は四正勤と云る行を勤て、四無畏の德を成就なされて在す、四無畏とは、一には正知無畏此は一切智を得て在す故、いかなる六ケ切事に出合せられても、知ぬ分らぬと云卑屈の心更になし、二には漏盡無畏、此は一切煩惱を

斷ド盡して在す故、三界輪回の迷ひに、沈みたまふ畏れ更になし、三には脱障無畏、此は大神通力を得て在す故、天魔外道の障りも、直ちに降伏して畏るゝの心更になし、四に説盡無畏、此は四無导七無导と云る、辨を具て在すゆへ、いかなる難問を云かけても、速かに説捌きたまひて、畏るの心更になし、この四無畏を一口に云はゞ一切世界に恐しきもの更になしと云こと、そこで無上依經に、心に畏るゝ所なきか故に、兩の肩平に整ひ、腋下に滿相を得たるなりと御説なされた、肩の骨腋下の相好を以て、無畏の德を示したまふはいかなる譯かと云に、人間天人の如きは、一切の事業を作に、十に八九は手の仕事、其で手が仕事の總將となり、仕事の數あるを、手數を繼と云、仕事の助を作を手傳と云、仕事のはかごらぬを、手間が入と云、その他手配りとか、手分るとか、手拔け手後れ、手當て

手違ひなどゝ、手に仕事を作の大器械なり、その手を上たり下たり自在に動かす機關と云べき所と、第一が肩と腋下との間だの骨、第二の機關は射し、即ち臂の骨、其で佛けが衆生濟度の、大事業を行ひたまふに、假に人間天人の、手仕事に準へて、手を動す機關と稱する、肩骨腋下と、射し臂骨と、二種の相好を以て、無畏自在の德を示したまふ、射し臂の莊嚴は、別相が擧てあるゆへ、今爰では肩骨腋下の、莊嚴の御話を致す、先づ佛の腋の下に、摩尼と云寶の珠が幾らもある、この摩尼はよほど貴ひ寶ら、毘楞伽摩尼、水精摩尼眞珠摩尼等と、その種類衆多に分れておれど、いよ〳〵最第一の寶は、毘楞伽摩尼と云に究る、極樂の寶林寶樹の間だに、五百億の宮殿樓閣がある、一々の宮殿、一々の樓閣に、諸の天童子か現はるゝ一々の天童子、この毘楞伽摩尼を以て、身の瓔珞と作り、帝釋天は

この毘楞伽摩尼を首にかけて、三十三天の城を築たまふ、觀世音菩薩は、この毘楞伽摩尼の寶冠に、本師彌陀の尊像を頂き在す、文殊菩薩は、この毘楞伽摩尼を以て、身の瓔珞と爲し、五百色の光明を放ち、その光りの中に日月星辰、諸天龍宮一切世間を現して、衆生濟度の御工夫をなさりて在す、此の摩尼の寶珠を、身に着ておれば惡魔外道が寄付す、惡鬼惡神の障りなし、火に入て燒ず、水に入て濡ず、斯る最上無比の寶である故、佛は腋下にこの摩尼寶珠をあまた並べて、無畏大自在の德を、一切衆生に拜せたまふ、この腋下の摩尼珠より、大光明を放ちたまふ、その光り紅と紫との二色、色の中に金の蓮花を現す、その蓮花無量百千の花と化す、一々の花の上に、無量塵數の化佛在す、この諸の化佛の腋下に、一千種の光明を放て、一光一佛を現し、千光千佛を現す、佛々の腋下より、亦た五色の光明を放て、十方世界に散け、本佛の髆腋相好の功德を說て、之を有緣の衆生に聞せたまふ、

第十九に兩臂脩直摩膝相

○往生要集に云く、雙る臂肘は明にして直し、膊圓なること象王の鼻の如し、平かに立て膝を摩づ、○大論に云く、正く手を立て、膝を摩るゝ相とは、俯さず、仰がず、掌を以て膝を摩るなり、○大集經に云く、怖畏を救ひ護て、臂肘の膊なるを得、他の事業を見て、佐助するか故に、手を以て膝を撫るの相を得たり、○大經に云く、威力自在なり、能く掌中に於て、一切世界を持つ、○維摩經に云く是の解脫に住する者は、三千大千世界を斷取て、陶家の輪の如く、右の掌中に着け、恒河沙世界の外に擲過すに、其中の衆生已が往く所を知らず、又復還て本所に置て、置を覺へざるなり、○觀佛經に

云く、肘の骨龍王の髪の如し、婉轉相着く、文彩壞れず、筋の頭に蟠まれる龍あり、其の迹を見ず、○觀佛經に云く、手の十指合鞔す掌に千輻の理ある、各々皆百千の光明を放てり、一々の光明分て千支となる、純ら紅色を作す、是の如きの衆の光り、遍く十方無量の世界を照す、照し已り化して金水となる、金水の中に一の妙なる水あり、水精の色の如し、餓鬼見れば熱を除て清涼、畜生見れば自ら宿命を識る、狂象見れば獅子王と爲る、獅子之を見れば金翅鳥と爲る、諸龍之を見れば金翅鳥王と爲る、是の諸の畜生各所尊と見る、心に恐怖を生ずて、合掌恭敬す、恭敬するを以ての故に、命終て天に生る、衆の人之を見れど梵天王の如し、或は日月星辰の如し、見已て歡喜す、命終て兜率天に生る、行者之を見れば、心眼卽ち開く時に十方界滿中化佛あり、一々の化佛手より光明を出して、行者の眼に入る、目を閉目を開て、恒に諸佛を見る、自ら身相を觀れば、妙なる寶瓶の中に、不淨あるか如し、是の如く見者、未だ通を得ずといへども、遍く十方に至て、諸佛に歴侍す、

この第十九の相好、兩臂修直摩膝相と云は、如來樣の臂射の莊嚴のこと、臂はひぢ射はうでぶし、佛の臂は平立膝を摩り申して、象の鼻の如く、平かに脩く、正直に立て而も自在に、自分の膝を撫たまふ、或は腕をずーつと舒して、掌を上に向けず下にも向けず、舒した儘で、自由に掌を以て、膝を撫たまふ、御互ひ人間の如きは、腕を舒した儘で、臂を正直に持て膝を撫で、或は掌を俯せず仰がずして、膝を撫るなどの業は叶はぬ、之を臂射不自在と云、佛は平立膝を摩るの自在を得て、他の怖畏を救ひ、他の事業を佐助するが故にと御說なされてある、他の怖畏を救ふことは、一衆生ありて、惡鬼

惡神の難に値ひ、獅子虎狼等の責に逢て、危きに臨んでおる者を救ひたまひたこと、他の事業を佐助するこは、一衆生ありて、善事の事業を企ておるを見て、その手傳をなされし事、佛は因位にかゝる慈悲善根の行を修したまひた故、兩手兩臂に、自在の術を證せられたものである、千手觀音には、手が千本ある、此は衆生濟度をなさるに、手數の多ひことを表したまひたもの、その樣子を知らずに、御姿たのみ拜むこ、百足の上天したのか、げド〳〵の成佛したのか位に思ふ外はなし、前席でも辨ぜし如く、手は仕事の總將、故に仕事を始めるを着手と云ふ、事業の弘ひを手弘ひこ云ふ、足や機械で致した事でも、手際が好こ云ふ、輕業を見に行ても、甲某の綱渡りは上手なり、上足こは云はぬ、乙某の足藝は下手なり、下足こは云はぬ、角力の手でも蹴とか蹈こか云、足の術も衆多あれこ、あの闘

取が蹴た、手際には感心だとか、土俵の際でじうつこ蹈止た、あれは全く手錬の功なこゝ評を入れる、相談は口でする事なれこも、何とか云事を忘れた時は、あれは大きに私が手落で有たこ云、口落こも舌落こも云はせぬ、淨瑠璃や歌は、口の所作なれこも、上手こか下手とか評して、上口こも下口とも云はせぬ、通例の玉篇字引で調べて見るに、手片の字が九百八十二文字ある、仕事を作す働くこ云意味に近き文字と、大概手片である、郵便脚夫や人力車夫は、足を早めて飛歩く仕事なれこも、此比は手透とか手揃こか云、かやふにそれ手は仕事の總將、依て千手觀音の像に、手弘ふに手配りして、衆生を濟度なさるゝ、自在自由の德を表したまひたものである、手が千あれば臂も千ある、故に千臂觀音とも名け奉る、千手經に亦た能く、一切衆生に令して、諸の天魔を降し、諸の外道を定め令むと

御説なされてある、手臂千手の威力を以て、諸の惡魔外道を對治せらる、千手の中四十二本の手には、劒ぎ戈弓矢鎖杵斧など、種々の兵器を提て在す、此が降魔の相と申して、天魔外道對治の德を表したまひたもの、餘の九百五十八本の手には、施無畏の印を結んで在す、此は一切衆生に、無畏の大自在を與へ、天地に充る惡鬼惡神を亡して、悉く佛果涅槃の、證りを得せしむると云、大威德を知せたまふ、觀音は本師彌陀の慈悲の堅り、其であまたの衆生を濟度のために、千臂千手と手々に手配り手分て、方便攝化の手當には、四十二種の兵器を提げ、九百有餘のあまたの手には、四無畏自在の印を結び、鬼神外道を手伐にして、聞法修行に、手拔手違ひ手後れのなひやうに、種々樣々に、手間をこめ手數をへて、本師彌陀の衆生濟度の、手傳ひなさるのが、觀音薩埵の誓願である、其衆生濟度の、

手分手配り手傳ひなさる、大自在を施したまふ、その機關と稱すべきものと、兩つの射し兩つの臂である、この臂は至て大切なるものゆへ、惠可禪師と申すと、臂を斷切て達摩大師へ供へ、安心の法印を授らせられたと正宗記に書てある、喜見菩薩と、百福莊嚴の臂を折屈め、その凹みに油をついで燈明を明し、七萬二千歲の間だ、之を明德如來の塔へ、供養せられたと法花經に說てある、亦た安穩德菩薩は、布を以て臂を縛り、凹みに油をつぎ、之に火を點ぐて佛を求め、將に諸の衆生を濟度せんと、誓を立られたことが、月燈三昧經に說てある、斯る奇特な修行をして、正覺を取たまひたが、佛や菩薩の證りにて在す、觀念の行者、佛の臂を觀ずるに、その觀相を三種に分て御說なさりてある、初めに臂の色を觀念し、次に臂の光明化して、瓔珞となるその奇瑞を觀念し、その瓔珞また化して、種

々の異相を作の、奇瑞を觀念す、之を名て兩臂觀と云、佛の腕節臂骨は、龍王の髮毛の狀を作し、婉轉と旋り旋りて、美しき畫採の紋あり、筋の頭は蟠まれる龍の如し、腕の力らよほど強く在して、一切世界を掌に乘たまふと、大無量壽經に御說なされてある、古の金剛左衞門や力士兵衛は、五十餘人力ありた、綴太郎には八十人力、曾我の五郎や、朝日奈などには八十五人力、辨慶には千人力、楚の項羽には八萬人力、何と力の强ひものも居ば居ものである、小ひ體だの人間でさへ、斯る珍しき大力を、二本の腕に持ておる、提婆が佛の新學の弟子を五百人、盜み取て象頭山に連歸り、五種の邪法を說て教へた、その時釋迦如來、弟子の舍利弗目連に命ずて、右の五百人を連歸せたまふ、提婆が高坐に上りて說法する所を、目連大神通を以て、提婆を眠らせ、そろつと抱て下へおろし、舍利弗高坐に

上りて、佛の正法を說き、新學諸僧に回心させて、その五百人を目連神通を以て兩手に乘せ、其儘楞鷲山に連歸られた、提婆眠り醒て後、これ全く釋迦の仕業なりと、大きに立腹致し、或時釋迦如來、象頭山の麓を通りたまふ時、山の頂きより大磐石を投かけた、其時山の半腹に、金比羅神が現れて、其岩を片手に抓み、ぐつとそれを握碎れた、大磐石を握碎ひたは、金比羅神の腕の力ら、五百人の新學を掌に乘せ、佛所に連歸りたは、大目連の手の力ら、況んや佛は無量世界の大法王、維摩經を開て見は、此解脫に住するもの、三千世界を片手に抓み、之を掌に乘の安きは、陶物作の細工人か、片手を以て輪を回すが如く、何の苦もなく煩ひもなひ、其大千界を、恒河沙界の外へ投過し、亦元の所へ抱戻すに、其中の衆生更に、知らず覺へざるなりと御說なさりてある、かゝる大强力を腕に持て在す

が、不思議解脱の佛體なり、

第二十に頷臆上半獅子相

○大般若經に云く、頷臆并で身の上半、獅子王の如し、○大論に云く、獅子は四足獸の中に獨歩して畏るゝなし、能く一切を伏す、佛も亦た是の如し、九十六種の外道中に於て、一切降伏するが故に、人中の獅子と名く、○往生要集に云く、胸に萬字あり、實相の印と名く、大光明を放つ、光りの中に無量百千の衆の花あり、一々の花の上に無量の化佛まします、是の諸の化佛に各千の光り有て、衆生を利益したまふ、遍く十方佛の頂さに入るとき、諸佛の胸より百千の光りを出す、一々の光り六波羅蜜を說く、○觀佛經に云く、如來の心は紅蓮花の如し、金の花映ひ蔽ふ、妙なる紫金の光りあり、以て間錯をなす、妙なる瑠璃の筒あり、懸りて佛の胸に在り、佛の身

内を見に、萬億の化佛まします、是の諸の化佛、佛心の間に遊ぶ、佛臍より光りを出す、その光り鬚然として須彌山の如し、衆の山の中間に、無量の寶山あり、是の諸の山の上に皆化佛まします、その光り千種、十千の色あり分て十億の支となる、億々の支下方を照し上方を照し、東西南北を照し、東南西南東北西北を照す、是の如き十方に諸の花あり、須彌山の如し、その山の上に百億の大菩薩ありこの化菩薩の臍の中より、各一大蓮花を生ず、一々の花の間だに、金色の光りあり、その光り猶し閻浮檀金の如し、中略その衆の光り合して光りの臺を成す、その諸の光りの臺に、無量塵數の大化佛ましまします、佛々の光明直ちに、上方の無量世界を照す、中略又た億々の光り下方を照す、下方の地をして閻浮提の、水色の如くなら令む恒沙の寶樓あり、寶樓の下に一の寶城あり、中略この諸の水化して

璃璃となる、瑠璃の地上に復、諸の樹きを生ず、樹きに四の龍あり
その龍の頂きの上に如意珠あり、その珠の光明、遍く龍の身を照す
龍の諸の毛孔より、金色の光りを出す、その光り直ちに下方無量世
界を照す、下方の地をして皆金色ならしむ、金色の地の上に金剛の
花あり、金剛の花の上に、金色の天女あり、皆慈心三昧海を讃じた
てまつる、中略諸の龍の毛端より、諸の寶の雲を出す、一々の雲の
中に恒沙の佛刹あり、一々の刹の中に、塵數の化佛ありて妙法を演
説したまふ、中略又た億々の光り東方を照す、東方の地をして白く
雪山の如くなら令む、諸の山の上に白寶の雲あり、この百寶の雲の
狀ち寶の臺の如し、一億の白き光りあり、是諸の白き光り、化して
金の臺となる、一の金臺の上に四の化佛ありて、皆慈法を説き、不
殺を讃歎したまふ、中略又た億々の光り南方を照す、南方の地をし

て皆紅色なら令む、この紅色の光り、乃ち南方無量世界に至り、變
じて白き雲となる、紅と白と分明なり、諸の雲の間だに諸の化佛あ
り、白眞珠の色、毘瑠璃の光り、上妙金の花、以て佛坐となす、是
の諸の化佛異口同音に、不殺及び大慈悲を讃じたまふ、中略又た億
々の光り西方を照す、乃ち西方無量世界に至る、其光り雜色にして
月の如く星の如く、諸の星月の中に七寶の珠あり、中略是の諸の寶
珠より、瑠璃の光りを出す、その光りの中に眞金の像あり、項じに
赤眞珠の光りを佩、その光りの中に綠り眞珠の化佛まします、異口
同音に大慈悲を讃じたまふ、中略又た億々の光り北方を照す、北方
の地をして皆珊瑚色なら令む、眞珠瑪瑙頗梨等の寶、以て間錯をな
す、一々の寶の中に一億の光りあり、一々の光りの中に、百億の化
佛在す、一々の佛の面、閻浮檀金の色の如し、髮は紺瑠璃の色、身

は百億の寶色、臂は紅眞珠の色、爪は眞金の色、手中の相白蓮花の色、鹿王の膊優曇花の色、足下の相毘楞摩尼の色、足下より五色の光りを放て、上髮際に至る、身の諸の毛孔の中に一億の菩薩あり、同音に妙法を演たまふ已下略す、

この第二十の相好、頷臆身半獅子相と云は、如來樣の胸の莊嚴のこと、屈で頷の付所より、腹に至までの間を、頷臆身半と云、佛の胸の粧ひ、威勢尤も堆かく、其勇猛なること、獅子王の如し、獅子は一切獸の中の長たるもの、威勢いよ〳〵強く、衆多の獸類並居中を、獨り歩むに恐るゝ氣色更になし、佛も亦其通り、一切の外道天魔惡鬼邪神の難に、露聊かも恐れたまはず、速かに之を降伏するの威力を、身の上半に顯現なさりて在す故、佛の胸の粧ひを獅子王の如しと御說なさりた、胸に黃金の筋あり、一々の筋皆卍字の狀を作

す、之を寶相の印と云、一々の文字より大光明が耀く、其光りの中に、無量百千の花鮮かに開て、無量の化佛を顯す、一々の化佛また千の光明を放て、諸の衆生を化益したまふ其光り十方諸佛の、頂さの中に潛れ入る、此時諸佛の胸より、亦百千の光明耀き現れて、甚深微妙の法を說く、觀佛三昧經に、妙なる瑠璃の筒ありて、佛の胸に懸ると、或は萬億の化佛佛心の間に遊ふ、或は佛心は紅蓮花の如し等と、御說なされてある、御互人間の體は、頭も手足も胸も腹も喉も表が見るのみ、更に中は見ぬ、見ぬが却て仕合せ、三十六物の不淨の體、若や見たら汚穢て、斯して膝付並て坐てはおれぬ、佛身は體の中まで莊嚴揃へ、妙なる瑠璃の筒こは、佛の咽喉のこと、咽喉こは咽吭なり、淸淨潔白にして世間に喩るなし、萬億の化佛ありて、佛心の間だに遊びたまふ、佛心は紅蓮花の如し、佛心とは佛の